

大宰府史跡

第30・31・32次発掘調査概報



昭和49年8月

九州歴史資料館

大宰府史跡

第30・31・32次発掘調査概報

昭和49年8月

九州歴史資料館

序

この調査概報は昭和48年度に実施した大宰府史跡調査の補遺篇である。前回報告した年度概報までに調査が完了しなかった第30次～第32次の発掘調査の成果を示すものである。

まず第30次の政庁跡西脇殿の調査では、遺跡の残存状態もかなり良好で、この殿堂と周辺の遺構についても種々の新しい知見を得ることが出来た。第31次の政庁東南限の確認調査では、新たに櫓列が検知され、政庁の境域についての資料を追加することが出来た。両次の調査はその後につづく問題処理の仕事も残されているが、当面の環境整備の基礎資料の検出という目的にもそった調査であった。第32次調査は住宅建設に伴う緊急調査であるので、調査区域に制約があり、従来もしばしば経験した遺構の本格的な性格を把握することが困難な部類に属する。将来の調査にそなえての記録である。

昭和49年8月1日

九州歴史資料館長 鏡山 猛

目 次

序

調査経過

1	概 要	1
2	第30次調査	2
	検出遺構	3
	出土遺物	5
	小 結	12
3	第31次調査	13
	検出遺構	14
	出土遺物	15
	小 結	30
4	第32次調査	32
	検出遺構	33
	出土遺物	34
	小 結	37

挿 図

第1図	大宰府史跡発掘調査地域図……………	(折込み)
第2図	第30次発掘調査遺構実測図……………	(折込み)
第3図	第30次発掘調査出土土器実測図……………	5
第4図	第30次発掘調査出土軒丸瓦拓影……………	7
第5図	第30次発掘調査出土軒平瓦拓影……………	8
第6図	第30次発掘調査出土文字瓦拓影……………	9
第7図	第30次発掘調査出土文様磚拓影……………	11
第8図	第31次発掘調査遺構実測図……………	(折込み)
第9図	第31次発掘調査出土土器実測図……………	16
第10図	第31次発掘調査出土土器実測図……………	18
第11図	第31次発掘調査出土土器実測図……………	20
第12図	第31次発掘調査出土土器実測図……………	22
第13図	第31次発掘調査出土土器実測図……………	24
第14図	第31次発掘調査SA560柱六出土土器実測図……………	25
第15図	第31次発掘調査出土軒先瓦拓影……………	26
第16図	第31次発掘調査出土文字瓦拓影……………	28
第17図	第31次発掘調査出土文様磚拓影……………	28
第18図	第31次発掘調査出土石製品・金属製品実測図……………	29
第19図	大宰府城内調査結果概念図……………	31
第20図	第32次発掘調査遺構実測図……………	33
第21図	第32次発掘調査出土土器実測図……………	35

図 版

- 図版1 第30次発掘調査地域全景(航空写真)
- 図版2 上 第30次発掘調査地域全景 北から
下 西脇殿建物(SB550)・玉石敷遺構(SX551) 東から
- 図版3 上 西脇殿建物(SB550)西面回廊 西から
下 西面回廊 北から

- 図版4 上・下 西脇殿建物 (S B550) 階段 東から
- 図版5 上・下 西脇殿建物 (S B550) 埴積基礎
- 図版6 上 第31次発掘調査地域全景 東から
下 櫓 (S A560) 西から
- 図版7 上 溝 (S D570) 西から
下 掘立柱建物 (S B580)・溝 (S D587) 東から
- 図版8 上 櫓 (S A565) 西から
下 溝 (S D570) 瓦積遺構 西から
- 図版9 上 井戸 (S E573) 南から
下 井戸 (S E572) 南から
- 図版10 上 第32次発掘調査南北トレンチ 北から
下 第32次発掘調査東西トレンチ 西から
- 図版11 第31次発掘調査出土土器
- 図版12 第31次発掘調査出土土器
- 図版13 第31・32次発掘調査出土土器
- 図版14 第30次発掘調査出土軒先瓦
- 図版15 第30次発掘調査出土鬼瓦
第31次発掘調査出土軒丸瓦・石製品・金属製品
- 図版16 上 第30次発掘調査出土文様埴
下 第31次発掘調査出土文様埴



第1図 大宰府史跡発掘調査地域図

調査経過

1. 概要

昭和48年度大宰府史跡の発掘調査計画および調査経過についてはすでに「大宰府史跡」—昭和48年度発掘調査概報—において報告した。しかしながら今回報告する第30・31・32次調査については調査途中であったため報告するにいたらなかった。この概報では、これらの調査結果について報告する。

まず第30次調査は昭和49年度に予定されている大宰府史跡環境整備事業において政庁回廊内の修景が行なわれるためその事前調査として政庁回廊内に東西対称に配置されている脇殿のうち西脇殿について行った。

この西脇殿については現在8個の礎石が残っており、調査はこの礎石を基準にして東西方向に2本、南北方向に1本のトレンチを設定し最上層の遺構の状況を把握することを目的とした。実測基準点設置、表土除去を行った後11月22日から遺構検出にとりかかった。

遺構検出を開始して間もなく南北トレンチにおいて東西に走る埴列と玉石敷遺構が検出された。これからみて遺構の残存状況が良好であり、また埴列は脇殿が埴積基壇である可能性のあることを考慮して、より明確な知見を得るためトレンチを拡張して調査を続行した。

この結果脇殿は南北に2棟ならび、いずれも埴積基壇を有する切妻造りの建物であることが判明した。またこの脇殿の前面には幅13.2尺で玉石敷が存在することが確認された。

このほか東西トレンチの西端において回廊の一部を検出した。写真撮影、遺構実測を行ったのち細部についての補足調査を行い4月2日調査を終了した。

第31次調査は昭和45年第4次調査において蔵司前面には築地が東西にのびることが確認されたが、この築地が政庁中軸線を境に東の地域にものびることが予想されたため、この築地確認のための調査を1月8日から開始した。

調査の結果は当初予想した位置には築地は検出できなかったが、その位置から約8mほど北へ寄った位置で東西にのびる柱穴を検出した。これにより政庁中軸線から東の地域においては政庁の南限が帯で区画されている可能性のあることが明らかとなった。

この間大宰府町大字観世音寺字日吉214-1番地について住宅建設にとまなう発掘届が提出されたため、これを第32次調査としてその事前調査を開始した。

当該地は左郭五条二坊にあたり調査は東西・南北にトレンチを設定し1月26日に着手した。調査の結果掘立柱建物2棟分の柱穴を検出したが住宅建設予定地であるためトレンチを拡張することについて土地所有者の承諾が得られなかった。このため建物の規模等を明確にし得ないまま調査を断念し3月12日に終了した。

なお今回の発掘調査地を地区別に列記すると下記の表のとおりである。

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第30次	6AYT-B	850㎡	1973・11・19～1974・4・2
第31次	6AYT-C	1150㎡	1974・1・8～1974・5・7
第32次	6AYI-C	250㎡	1974・1・26～1974・3・12

第1表 発掘調査実施表

2. 第30次調査

第30次発掘調査は政庁地区回廊内の西脇殿について行った。東西、両脇殿は、従来より研究が行なわれており、その規模、配置等については現存する礎石から推定されている。政庁地区においては、これまでに南門・中門・回廊西南隅・同東北隅・正殿後方東北隅の5ヶ所について発掘調査を終了しており、政庁の規模、配置関係については両脇殿の調査を残しているほかは明確となった。既に南門・中門・東面回廊の整備事業も終了している。したがって今回の調査は、政庁地区西面回廊および両脇殿の整備のための一環でもあり、脇殿の規模、配置等を明確にすることを主要な目的とした。

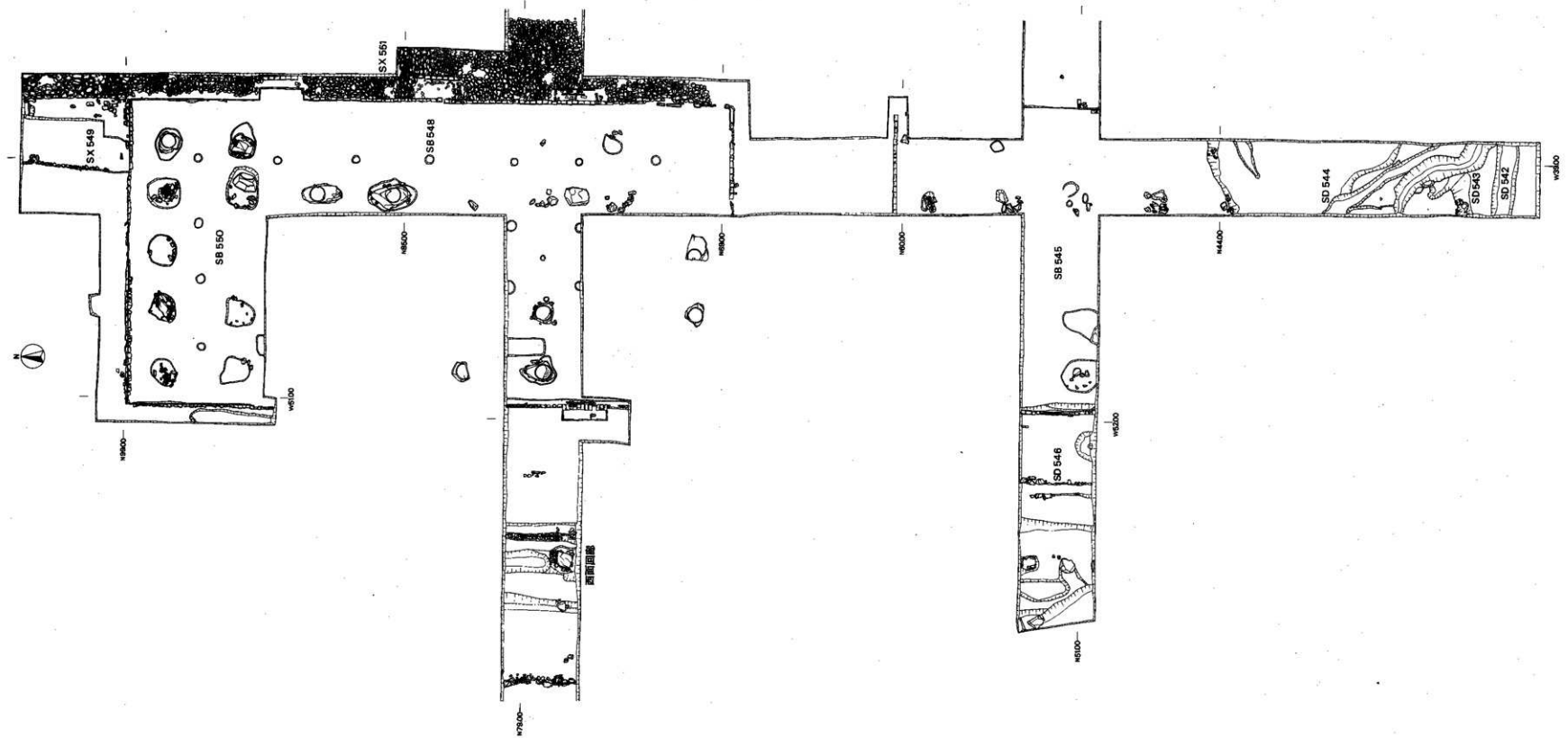
調査は現在、8個の礎石を残している西脇殿について行うこととした。中軸線から西方へ約40mのところである。調査対象地のさらに西側においては、かなりの落差が認められ正殿跡西方では約2m、南方に従ってS字状にゆるくカーブし、南方で約30cm程度である。発掘調査は当初幅4m、長さ76mの南北トレンチと幅4m、長さ42mの東西トレンチ2本を設定し調査を開始したが、検出遺構の状況により逐次拡張し、約850㎡について行った。

その結果、埴積基壇建物2棟、玉石敷遺構、回廊等を検出した。

発掘調査は、第26次調査の埋めもどし作業と並行して行い、表土除去作業を終了したのは昭和48年11月21日である。11月22日から遺構検出に入った。遺構面は以外に浅く、北方で表土下約30cm、南方で約60cmである。遺構検出を開始して間もなく、米木丘陵の緊急調査を行ったために12月3日から作業員が半数となった。又遺構の解明に関連してトレンチを拡張したため遺構検出を終了したのは、昭和49年1月19日である。写真撮影を行った後、遺構実測は西面回廊の整備作業との関係から西面回廊の実測と細部の検討を優先し、2月16日実測を終了した。図面作成後、下層遺構の検出作業に着手した。下層遺構はSB550の中央部を東西3m、南北10.4m、深さ約40cm掘り下げたが遺構は検出できず、4月2日調査を終了した。

検出遺構

第30次調査で検出した主な遺構は、埴積基壇建物2棟、回廊、玉石敷遺構、溝などである。



第 2 图 第30次发掘调查遗址平面图

遺構面は表土から非常に浅いところで検出した。以下これらの遺構についてのべる。

埴積基壇建物 (SB550) 基壇幅は東西15.3m (50.5尺)、南北30.3m (101尺)である。基壇面は全体的に削平が激しく、北方で梁行柱列の北側から2列を残存するのみで、桁行柱列の東側から1列はほとんど掘り方すら残っていない。したがって現存する8個の礎石と根石から推測して、この建物は梁行4間(柱間寸法9.5尺)、桁行7間(柱間寸法12.5尺)の東西廂の切妻造りの建物と考えられる。礎石は8個現存し、うち1個は動いている。この礎石柱座から北方と南方では約10cmのレベル差が認められる。しかし位置的には移動していないことが判った。又基壇東北隅では礎石3個を新に検出した。これらの礎石は後世の耕作のため埋め込まれたものであろう。

基壇は埴積みで、縦18cm、横29cm、厚さ6cmの埴を使用している。最下段は平積み(長辺の木口を外に向ける)、次に立てる2段構成によるものであるが、位置によって最下段の平積みがないところもある。基壇北西部で最も保存状態がよく高さ35cmである。埴積基壇構築に際しては基壇内側から掘込み、裏込めされていることが認められた。基壇北西隅部では、いわゆる鴻臚館式の軒平瓦が2枚立った状態で検出された。おそらく埴の代用として補修したものであろう。

又、建物東面と西面には3個所ずつの階段が設けられていた。階段は幅2.2m (7.2尺)、基壇からの張出し60cm (2.0尺)である。建物東面の中央と右側の階段前の踏面には、6~7個の埴を敷いており、その踏面と礎石柱座までの高さは約61cmである。中央の階段では、SX 551にはさまれて、小石と瓦が混った舗道を東西方向に検出した。幅2m (6.6尺)である。又、西面右側の階段に文様埴3個体を、最下段の蹴上げの部分に立った状態で検出した。階段は基壇が構築された後の事業として作られていることを確認した。

この他、身舎内で桁行柱列の東から四列と五列の間に土器溜りを検出した。この土器溜りは床土下から掘り込まれていて、東西トレンチに検出した凹みと接続するものでないかと考えられる。土器溜りからは土師器杯、小皿が数点出土した。又、SB 550の内部に検出した付属施設の柱穴(SB548)がある。梁行3間、桁行6間のべた柱である。柱間寸法は区々で、梁行約9尺、桁行約11尺である。柱穴は径約30~40cm、深さ約20cmでいずれも四隅の礎石に囲まれた中間部に掘られたものである。これらはSB 550を構築するさいの足場と考えられる。

埴積基壇建物 (SB545) 後世の擾乱によるため基壇の埴積列は、北面と西面で検出したのみである。北面の埴積列は最下段の平積み部分を残すのみである。西面の埴積列は平積みと一部立った埴を検出し、その構築状態はSB 550と同じである。礎石はすでになく、掘り方と根石がわずかに残存するのみで、柱間寸法はSB 550と同じ梁行9.5尺、桁行12.5尺で7間×4間の建物であると推測される。

階段は西面で、埴列を2個検出した。基壇から西方は後世の擾乱が激しく、階段の原形を検出するには困難であった。

玉石敷遺構 (S X 551) S B 550の東側に検出した玉石敷遺構である。玉石は長さ約20cm程度のもので、東西幅4m (13.2尺) で南北方向に検出した。これらは小石、縄目文瓦片を多量に含んだ暗茶灰色土の整地地面の上に敷かれたもので、平積みのもつとほぼ同じ高さである。

西面回廊 第6次調査で検出した西面回廊の延長である。回廊は中心部から西方にかけて約50cmの落差が認められる^(図1)。そのため西側の礎石は取り去られ、わずか2個の根石を残すのみであった。礎石は花崗岩の自然石で、その根石との中心距離は、梁行3.90m (13尺) で、第6次、第15次調査の結果と一致する。桁行は発掘範囲狭少のため不明である。又、礎石と礎石の間部、左右から^(図2)6.5尺の位置に小礎石を検出した。これは第6次調査の西面回廊で検出したI・II期に相当する小礎石に類似している。第6次調査のそれも上面が平たい約40cmほどの石で、今回検出したものと同じである。これらの性格については今後の課題としたい。

回廊内側には幅70cm (2.1尺)、深さ約20cmの雨落溝を検出した。回廊基壇は、瓦積み基壇で、丸瓦を縦にならべ、その上に丸・平瓦片を小口積みしたものである。瓦の大部分が縄目文叩き瓦で、現存高約20cmである。又、S B 550と西面回廊基壇との間は6.5m (21.5尺) あり瓦を含んだ整地層である。この整地層では、層位的に瓦を検出することができた。下層においては約98%が縄目文叩き瓦で2%は格子目の叩き瓦である。反対に上層においてはそのほとんどが格子目の叩き瓦であった。

西面回廊基壇西側は人頭大の自然石を2～3段組んだ乱石積みで、高さ約30cmである。雨落溝は不明確であるが、多量の瓦が、落下した状態で出土した。

石列遺構 (S X 549) S B 550の北側に接して検出した石列遺構である。石は径約10～15cmほどで、西側に石面を合せている。石列は中軸線とは若干東に振れている。したがってS B 550とは関連しない、後世の施設であろう。

溝 (S D 542・543・544・546) S D 542・543・544は、S B 545の南方に検出した溝である。S D 542は幅約1m、深さ約40cmで東西方向に検出した。又、S D 543・544は幅60cm～1.5m、深さ約20cmで北西から南東方向に検出した溝である。これらの溝に関しては後世の擾乱が激しく、溝埋土中には拳大の瓦、石が乱入していて、層位的にも近世の溝であると考えられる。

S D 546はS B 545の西に検出した石組による溝である。溝は幅50cm、深さ10cmで南北方向に検出した。S B 545の西方は後世の擾乱土と考えられる灰褐色土に覆れ、これらの性格は明確にしえなかった。

以上が第30次調査で検出した主な遺構である。この他S X 551およびS B 545の東部において、瓦と小石が混り合った整地地面を検出した。これは層位的にもS X 551と同じであるが性格等につ

いては今後の課題とした。又、S B 550の西側において瓦溜りを検出したが、含まれている瓦のほとんどが、格子目子目文の叩き瓦である。

註1 大宰府史跡 昭和45年度発掘調査の概要 福岡県文化財報告書第47集 1971

註2 大宰府史跡 昭和47年度発掘調査略報 九州歴史資料館 昭和48年3月

出土遺物

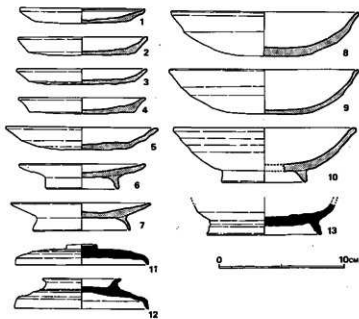
第30次調査において出土した遺物は土器、瓦類である。土器は特にS B 550の土器溜りと西面回廊の凹み、またS X 547付近から若干の坏、小皿類を検出した。このS X 547においては後世の擾乱が激しく、層位的にも不明瞭であるが、大きく2層に分けることができ、上層は灰褐土、下層は暗褐土である。これらの層からは土器片を若干検出した。

瓦類は主にS B 550の北側と、瓦溜りS X 552、さらに西面回廊の西側雨落溝から多量に出土した。また、S B 550と西面回廊の間の整地層から出土した瓦は、層位的に取り上げることができ、建物と回廊を考慮する好資料となった。この他、階段に使用されていた文様埴3点、鬼瓦1点がある。特に今回出土した文様埴は建物の階段に使用されていたものであり、遺構と結びついているという点において、貴重な資料として注目される。

土師器 (第3図・1~10)

小皿 (1~5)

1・2・5は瓦層、
3・4は回廊凹みからの出土。いずれも口径9.8~10.2cm、器高1.3~1.5cmほどの小皿であるが、5は口径12.0cm、器高1.8cmとやや大きい。淡い茶灰色に近い色調を呈し、胎土は砂粒をほとんど含まないものが多い。軟質でやや脆いものもあるが、大半は硬質に焼成されている。すべてヘラ切り底である。体部は横なでないしなで調整が



第3図 第30次発掘調査出土土器実測図

ほどこされている。1の外面は底部から口縁にかけて外弯するように広がる。内面の口縁近くには凹線がみられるが全体には及ばない。底部と体部との境は不明瞭である。4は1にくらべて底部と体部とが鋭く境されている。底部はほぼ水平につくられており、安定感がある。

2・3は兩者の中間的形態を示している。5は1～4にくらべて若干大きい。諸特徴は一致している。3～5には甕状圧痕が認められる。

有高台皿(6・7) 6は部分的に赤味をおびた淡黄色の有高台皿で、口径10.0cm、器高2.0cmに復元される。浅くつくられた皿部は全体に横なで調整されているが、外底部の調整は不明である。貼付けられた高台もなで調整で仕上げられている。砂粒を若干含むものの精選された胎土がもらいられており、硬質に焼成されている。7は6とほぼ同形態をなすが、高台が若干外方に広がっている。口径11.0cm、器高2.2cmに復元され、6よりも一まわり大きい。赤褐色を呈している。胎土はよく精選され砂粒をほとんど含まないが、やや軟質の焼成と相俟って脆くなっている。そのため器面が剝離し、調整は明らかでない。

杯(8・9) 8はSD546・SX547にわたる攪乱土からの出土で、ほぼ完形の杯である。口径14.7cm、器高3.5cm。淡茶灰色を呈する。胎土にはかなり多くの砂粒を含んでおり、やや硬質に焼成されている。内外面ともに一部を除いて横なで調整で仕上げられており、口縁部外面には幅約1.3cmほどの凹部がめぐらされている。底部はヘラ切りである。9はほぼ同大の杯であるが、かなり薄手に仕上げられている。色調・胎土ともに8と同様であるが、焼成はやや軟かく脆い。そのためか器面が剝離し、調整の観察を困難にしている。

有高台杯(10) 口径14.5cm、器高4.4cmほどに復元される有高台杯の破片が出土している。体部はわずかに内弯するように外に広がるが、上部では直線的である。淡茶灰色を呈する。胎土に砂粒を多く含み、器面にそれが目立っている。全体に横なで調整をていねいにほどこしているが、砂粒のためか仕上げはよくない。ことに内面には縦横に擦痕が走り、調整の良さをころしている。かなり硬質に焼成されている。

須惠器(第3図・11～13、図版13)

杯蓋(11・12) 11は扁平なつまみを有する、口径10.5cm、器高1.7cmの杯蓋である。扁平なつまみの中央はやや凹んでいる。口縁部の先端はくの字状に屈折する。天井部はヘラ削りされているが、つまみ・口縁部付近および内面は横なでないしなで調整されている。大粒の砂粒の目立つ胎土を用い、堅緻に焼成されている。小豆色を呈している。12は埴壇基壇礎石建物SB550の基壇横土からの出土である。口縁部の先端がくの字状に屈折する点は11に似るが、やや深くなっている。つまみの形は11と大きく異なり、環状を呈している。つまみの上端はほぼ平坦につくられ、外方に向かってつまみ出されている。天井部の一部(環状つまみの内部)がヘラ削りされているほかはすべて横なでないしなで調整されている。砂粒をほとんど含まぬ胎土で、堅緻に焼成されている。黒灰色を呈する。本例は蓋として扱ったが、その特徴から身(有

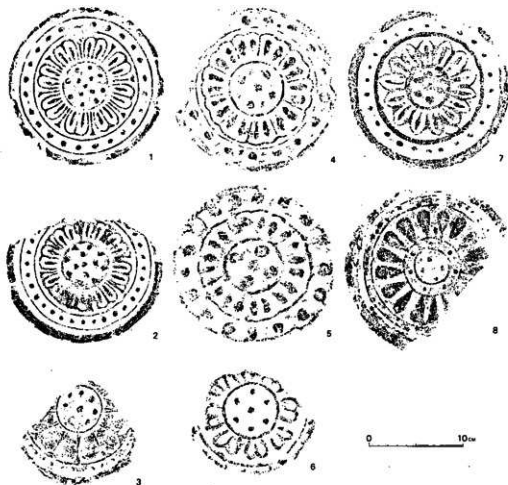
高台皿)の可能性も考えられよう。

有高台杯(13) 回廊凹みから底部の破片が出土した。灰色を呈し、硬質に焼成されているが、胎土に多くの砂粒を含むため器表の感じはよくない。外底部がヘラ切りされているほかは横なでなしで調整をされている。高台は外に広がるように付けられており、安定感を増している。外底部にはX字状のヘラ記号が付されている。

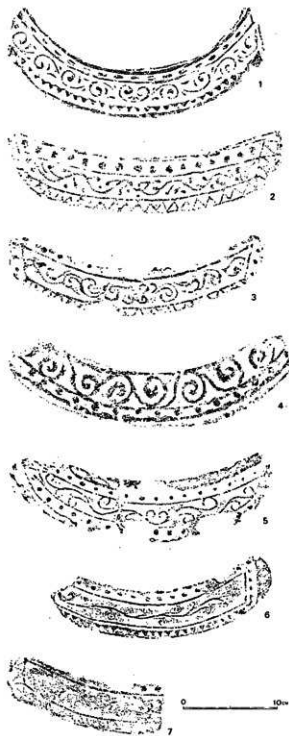
瓦埴類

今回の調査で出土した瓦埴類は丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦と埴(文様埴を含む)、鬼瓦等である。瓦類は昭和48年度概報・第26次調査において若干の説明があり、今回の調査で出土し

(図1)



第4図 第30次発掘調査出土軒丸瓦拓影

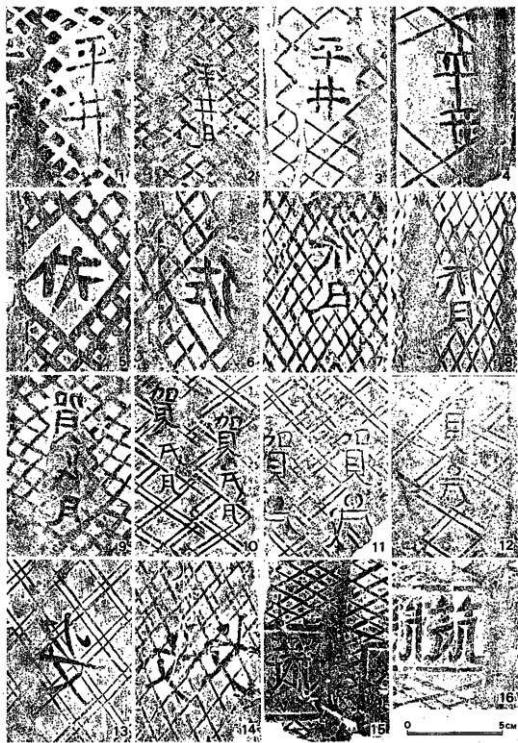


第5図 第30次発掘調査出土軒平瓦拓影

た瓦と重複している点が多い。したがって図版に示した瓦は、出土数の多いもの、また新しく出土したものである。

軒先瓦は全総数276個体で、文字瓦は279個体である。この他、文様埴3個、鬼瓦1個を検出した。

軒丸瓦は総数127個体で15型式18種類に分類できる。このうち最も多く出土したものは、鴻臚館式とよばれているもので2種類に分類できる(第4図1、2)。1は全体の出土量の約37%を占め、これまでの調査で出土量が最も多く、第5図一1と組合うものである。2の出土率は10%である。1に比べて瓦当径が小さく、花卉の長さも短い。また外区珠文が1は24個に対し2は32個で、間隔が1に比べて密である。第4図一7は鴻臚館式に次いで出土率が高く約13%である。この瓦はSB550北側の雨落ち、茶褐土から最も多く出土した。中房に1+6の蓮子を配し、花卉は14弁細弁蓮華文で、弁中央にはつぶれた子葉を配す。外区は25個の珠文がめぐる。全体に粗雑さを感じさせ胎土には砂を多量に含んでいる。丸瓦部に「平井瓦」銘の印目文がある。第4図一6は、昭和48年度概要の第11図一6に示した瓦に類似している。これを前者とすると、今回出土のもの(後者)は前者に比較して瓦当がひとまわり小さく、中房は前者が1



第6圖 第30次発掘調査出土文字瓦拓影

+8に対し、後者は1+6である。又、花卉が前者に比べて短い。八弁複弁蓮華文瓦で外区は密に珠文を配す。新しい種類のもので2個出土した。

軒平瓦は総数149個体で19型式20種類に分類できる。第5図-1は出土率約35%を占め、第4図-1と同じくSB550の北側から多量に出土した。第5図-3は約25%の出土率で、先に述べたごとく第4図-7と大部分が出土場所、出土量などを同じくするものである。瓦は唐草を4隅に配した中心筋を中心に、左右に2回反転する均正唐草文である。上外区は珠文、下外区は線鋸歯文、左・右脇区は3個の珠文を配す。胎土は砂粒が多く、軟質である。第5図-4は今回新しく出土したもので、左から右に7回反転する偏行唐草文である。下外区は大きな珠文14個を配す。唐草の波高が大きく、瓦当面長30.1cm、幅5.7cmである。頸部は段がつき縄目文の印きが残る。胎土は砂粒が多く全体に粗雑である。第5図-7は瓦当面がつぶれて文様は不明瞭であるが、左に2回反転する均正唐草文と思われる。上外区は珠文、下外区・左脇区は線鋸歯文である。

文字瓦は出土総数279個体で大きく14型式に分類できる。文字瓦は書体、印目文などから数種に分類でき、今回出土したのものでは「平井」13種類、「佐」9種類、「賀茂」8種類、「園」2種類、「安」2種類に分けられ、他9種については、各々1~3個の出土であった。それらを総合すると43種類になる。先にも述べたごとく、第6図に示したものは出土率の多いものを掲載した。

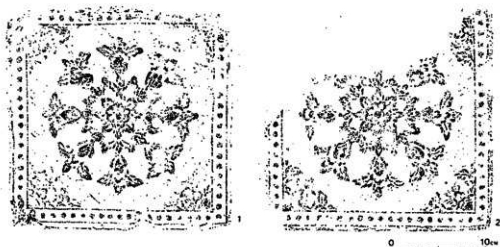
今回出土の中で最も多いのは「佐・佐瓦」銘類で、総数115個体、9種類に分類できる。このうち第6図-7・8は書体変形の文字瓦で、7はこれまでに明らかにされており、8は新種で今回14個出土した。「平井・平井瓦」銘は不明瞭なものを含めて総数91個体で13種類に分けられる。

これら「佐・佐瓦」、「平井・平井瓦」銘の文字瓦は、政庁地区はもちろん、学校院、観世音寺地区の調査で溝、井戸等の埋土中から多量に出土している。

文様埴(第7図1.2) 今回の調査で、特に顕著な遺物として文様埴がある。文様埴はこれまでの調査で第6次調査、第9次調査、第26次調査、第27次調査^(注3)で出土しているが、今回のように完全な形で、しかも用途が明瞭で検出したのは初めてである。

文様埴は3個体検出した。SB550の基壇西側の右階段で、下段の蹴上げの部分に3個検出した。1辺が23.5cmの正方形を呈し、厚さ6cmである。文様面中央には唐花文を配し、各弁の先端からは華麗な八花文が広がる。四隅には観唐草文を配し、唐花文との間には斜方向の水波文が走る。外区には密に珠文をめぐらし80個を数える。胎土は砂が多く、やや軟質で外面は黒色に焼きあげている。

これまでも政庁内の調査で文様埴を検出しているが、第6次出土のものは、太宰府天満宮蔵の伝学校院出土と同様のもので、今回第31次調査でも完形品が出土した。第26次調査で出土



第7図 第30次発掘調査出土文様磚拓影

したものは所謂「三角埴」で観世音寺蔵のものと同様である。したがってこれまでの大宰府出土の文様埴は3種類といえる。

鬼瓦(図版15) 今回出土した鬼瓦は、従来、重要文化財に指定されている伝都府楼跡出土のものと同種のものである。SB550北側の茶褐土瓦層から破砕した状態で検出された。部分的に欠損しているが、復原可能であり、これまでにない逸品といえる。

鬼瓦は、全長47.1cm、下底部幅43.8cm、最上部幅33.8cmである。又、軒丸瓦の安置部は、上部で径14.3cm、下部はアーチ形状に削ったもので径15.5cmである。額の上端は一部欠損しているが復原可能である。鬼面は肉盛りが厚く、眉はつり上り、目は四天王の眼のように鋭く、口を大きく開いた憤怒相は、大宰府独特のものである。眉間部には径2.5cmの釘穴を穿け、頬から鼻に達して肉盛りは最高で厚さ約12cmである。口は大きく上顎に6本の歯と左右に2本の牙を配し、下顎には小さな牙を上向きに設けている。外区下部の珠文帯は磨滅して不明瞭であるが、珠文を有するものと思われる。裏面はヘラケズリであり、全体に淡黄白色で焼成は軟質である。

次に第4図・7、第5図・3と文様埴等の出土状況について若干ふれてみたい。

第4図・7と第5図・3は前に若干ふれたようにSB550の北側の瓦層より一括して検出したものである。これらは出土時において相互の重った状態、又小範囲内で出土率が高いこと、出土層が遺構面に接した瓦層であることなどが注目される。よってこれらを総合すると相互をセット関係として推測して可能と思われる。

文様埴は、SB550と西面回廊の間の整地層面に階段が構築され、その蹴上げ部に使用されていたものである。先に記したように西面回廊東側の雨落溝はⅠ・Ⅱ期、Ⅲ期の2次期に分かれ、

これに関連して整地面を分けることができた。よってⅠ・Ⅱ期における整地面をたどれば、最下段の蹴上げ部を検出できるが、Ⅲ期の整地面をたどると蹴上げ部は検出できない。したがって、Ⅰ・Ⅱ期の縄目文叩き瓦片を含んだ整地面に構築したことが明確となった。このことから文様埴は平安時代まで下らない時期に構築されたものと考えられる。

註1 大宰府史跡 昭和48年度発掘調査概報 九州歴史資料館 昭和49年3月

註2 同上

註3 大宰府史跡 昭和45年度発掘調査の概要 福岡県文化財報告書第47集 1971

註4 大宰府史跡 第9・10・11次発掘調査概要 福岡県教育委員会 1971-9

註5 大宰府史跡 昭和48年度発掘調査概報 九州歴史資料館 昭和49年3月

註6 飛鳥白鳳の古瓦 奈良国立博物館 東京美術

小 結

政庁地域については、これまで南門・中門の調査（第1次）、西南隅回廊の調査（第6次）、東北隅回廊の調査（第15次）、正殿後方の調査（第26次）と4回にわたって行ってきた。その主たる目的は、遺構の規模、配置等を明確にするものであった。昭和48年度概要^(註1)に記した様に政庁内域をめぐる回廊、築地等の規模については第26次調査をもってほぼ確認できたことになる。既に調査終了した部分については、整備事業も終了している。よって、今回の第30次調査^(註2)で、政庁内の規模、配置等は一応明確となったといえよう。

以下第30次調査に関して若干ふれることとする。今回の調査で検出した建物2棟は遺構面より約30cmの掘込み事業をしており、酸化鉄分を含んだ茶褐色硬質土の上に版築していることが明らかとなった。階段については、前にふれたとおりであるが、礎石柱座までの高さ61cmと階段の張出し60cmを考慮すると、踏面、蹴上げの寸法は各々約20cm前後であると推定される。このことから今回検出した階段は踏面約20cm、蹴上げ約20cmで傾斜45度の3段ではないかと考えられる。また中門・南門、第6次調査結果において焼土層の存在を確認されており、それから出土した瓦等より10世紀前半頃と推測されている。しかし今回の調査においては焼土層は認められなかった。したがって西面回廊とS B550間の整地層から出土した瓦、S B550北側から出土した瓦、S X551を作る際の整地層などから判断して構築物下限の時期を10世紀前半をや、さかのぼるものと考えられる。

註1 大宰府史跡 昭和48年度発掘調査概報 九州歴史資料館 昭和49年3月

註2 第30次発掘調査については大宰府発掘調査指導委員の浅野清・太田静六両氏の指導をうけるとともに九州芸術工科大学教授沢村仁氏にはたびたび現地に来てもらい指導をうけた。

3. 第31次調査

第31次調査は政庁跡の東を南北にのびる通称月山とよばれている丘陵のすぐ南の水田約1150㎡について行った。

この政庁跡付近は東から月山、蔵司、米木の三つの丘陵が南北にのびているがこの三つの丘陵と県道吉木一関屋線との中間にほぼ東西方向に1～2m前後の落差が認められる。

昭和45年第4次調査として行った蔵司と米木の丘陵には生まれた地域ではこの部分に築地が検出され、さらに東、西にのびることが確認されている。この調査結果によると検出した築地は長さ19mの範囲であるが築地の規模は基底部幅4.48～4.60mで寄柱と考えられる柱穴6個も検出されている。これは政庁の南門から東西にのびる築地の規模とほぼ一致した大きさのものである。さらにこの築地東半部においては政庁中軸線から325.30m(3町)のところで脇門と考えられる遺構を検出している。

このように、この地形の落差は政庁の南を画すると考えられる築地の痕跡を示すものであることが明らかとなった。しかしながらこの築地は南門に接続する築地よりは約16m南へ寄っており、これら相互の接続関係は問題点として残されている。さらにこの築地の西方への延長部分についても同様である。

この築地の線を政庁中軸線を境に東へ折るかえすと今回の発掘調査の対象地とした月山南の水田の南端にくる。この部分にも約1m前後の落差が認められ、さらにこの落差は発掘地域の東端すなはち政庁中軸線から約160mのところまで道路に沿って北へ折れる。

今回はこのような地形から、この水田部分においても蔵司の前面同様築地が通るものと想定し、その遺構を確認することを主要な目的とした。

調査は当該地が私有地であり、かつ水田であるため耕作に影響を及ぼさないよう考慮して1月早々に着手した。

基準点設置、耕作土を除去した後1月17日から遺構検出を開始した。途中発掘地域北半部のSD570、SD587には多量の土器が包含されており、これが検出にかなりの時間を費やした。遺構検出がほぼ終了に近ずいた4月5日発掘地域の中央部において東西に走る柱穴を検出した。この柱穴は後の溝によってかなり削平されていたため検出に多少困難をともなったが結局20間分を検出し榭であることが明確となった。4月15日遺構検出を終了し、写真撮影、実測を行った後、細部について補足調査を行い5月7日調査を終了した。

検出遺構

第31次調査において検出した主な遺構は榭、掘立柱建物、溝、井戸、土坑、ピット群などで

ある。これらは遺構の重複関係から3期に分けられる。まずⅠ期に属する遺構は発掘地域の中央部を東西に走る櫓(SA 560)、北半部で検出した掘立柱建物(SB 580)および櫓(SA 565)でありⅡ期は溝(SD 562、570、587)が主体であり、Ⅲ期に属するものは井戸(SE 573)、土坑(SK 575、577、579、581、582、583)およびピット群である。次にこれらの遺構について述べる。

櫓(SA 560) 発掘地域の中央部を東西にのびるもので今回は20間分を検出した。柱穴は0.8~1m前後の方形であるが、これらは後の溝(SD 562)によってこわされており、特に西半部において著しい。柱間寸法は多少の出入りはあるがほぼ2.10m(7尺)である。

この柱穴の埋土からは数片の土器片が検出されたが、時期を推定できるものは第14図に示した須恵器の坏1点のみである。

この櫓は当初築地を想定した位置より7.80m北へ寄っており第4次調査で検出した築地と南門築地線とのほぼ中間にあたる。

櫓(SA 565) 櫓(SA 560)の北3mの位置にこれと平行して走るものである。4間分を検出したのみであるが、柱穴は一辺0.8m前後の方形であり柱間寸法は8尺等間である。

性格は不明であるが目隠堀的なものであろう。

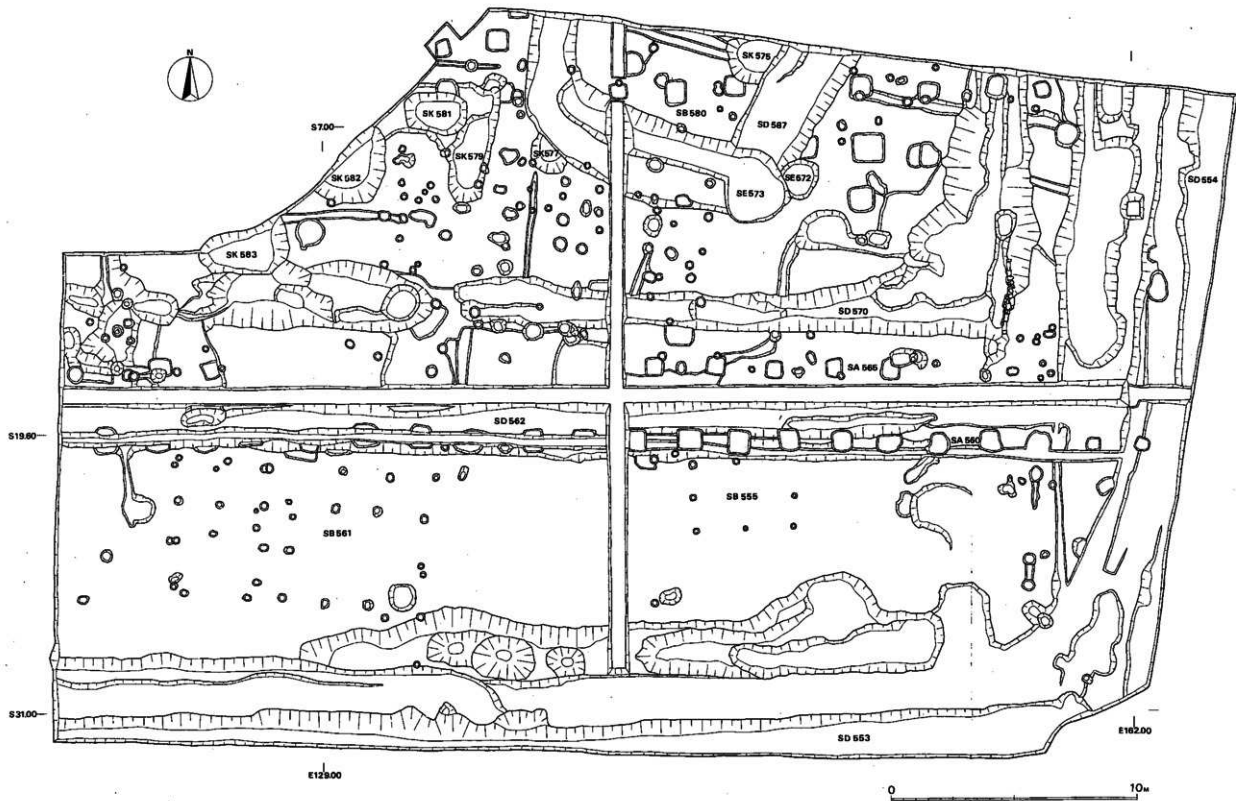
掘立柱建物(SB 580) 発掘地域北半部において検出した。梁行2間(柱間寸法7.5尺)、桁行7間(柱間寸法8尺)の東西棟である。この建物の柱穴は溝(SD 587)等によってこわされているものが多く、さらに南側の柱列については溝(SD 587)の溝肩に1個を検出したが他の柱穴は検出できておらず建物としてのまとめかたには多少の疑問が残る。

溝(SD 587) 発掘地域北辺部において検出した。コ字形に屈曲しており、幅約3.0m、深さ0.8m前後のものである。この溝の埋土からは第13図に示すごとく土器を主体としたおびたしい量の土器を検出した。

溝(SD 570) 発掘地域の北半部で検出したL字形の築掘りの溝である。埋土の状況から流れた形跡はほとんど認められなかった。

溝幅は一定しておらず東西方向の溝では1.5~3.0mで櫓(SA 560)とほぼ平行に走っている。政庁中軸線から約156mのところで直角に北へ折れる。この屈折する部分は擾乱のためか溝幅が広がっており、また溝の東側には長さ3mにわたって瓦、石をもちいて護岸のためと見られる施設が南北方向に検出された。これに使用されている瓦は格子目の叩きのものがほとんどで「平井」、「佐」の文字瓦も含んでいる。この溝の埋土からもSD 587同様多量の土器を検出した。

溝(SD 562) 発掘地域中央部を東西に走るもので櫓(SA 560)と位置をほとんど同じくしている。この溝のため櫓の柱穴掘方はかなりこわされている。溝幅は2.5m前後で浅い溝



第 8 图 第 31 次发掘调查遗址平面图

であるが溝の南肩に沿って幅 0.5m ほど一段深くなっている。

井戸 (SE 572) 発掘地域北辺中央部において2基の井戸を検出した。SE 572は溝(SD 587)によって掘方の一部がきられている。掘り方は径 1.5m の不整円形で深さは約 0.8m である。井戸枠は一辺が約 0.7m の方形で、幅15cm程度の板を縦に組み合せ横桟で固定している。腐蝕が激しく遺存状況は悪い。

井戸 (SE 573) 井戸 (SE 572) の西に接して検出した。この井戸は溝 (SD 587) の溝肩を切って構築されており、SE 572とともに、これらの遺構の前後関係を明確に把握し得た。掘り方は径が 2.5m の不整円形で深さは約 1m である。井戸枠はすべて消失しており掘り方の底に接して直径 0.6m の曲物が残っているのみであった。この曲物の内・外に杭を打ち込んで曲物を固定している。構造としては第9次調査の学校院東辺部において検出した円形の桶側縁の枠を数段積み重ねたものと推定される。

溝 (SD 553、554) 今回検出した溝の中では、もっとも新しい時期のものである。

現在県道に沿ってL字形に農業用水路が流れているが、この二本の溝はこれと位置をほぼ同じくしている。SD 553とSD 554とが現水路と同様に接続しているか否かについては今回の調査では明確にし得なかった。これらの溝の埋土から出土する遺物から見てほぼ中世末から近世にかけての水路であると推定できる。

掘立柱建物 (SB 555、561) 櫛 (SA 560) の南に掘立柱建物2棟を検出した。

この2棟の建物の柱穴掘り方はいずれも0.2~0.3mの小規模のものである。SB 555は梁行2間、桁行3間であるが柱間は一定していない。

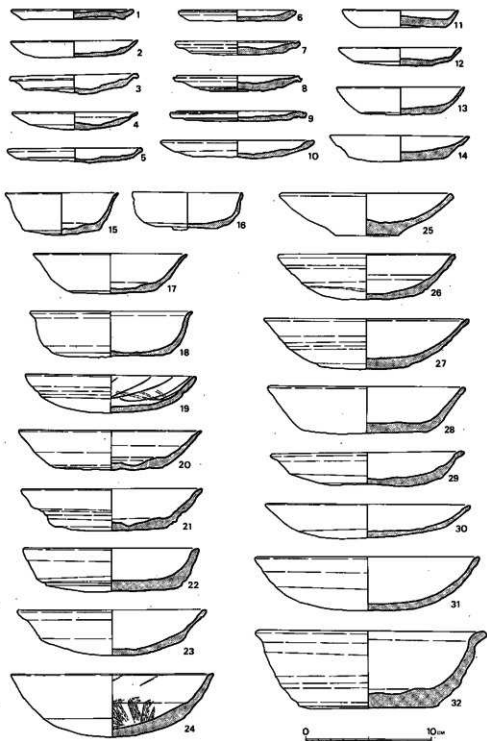
SB 561は一応梁行3間、桁行6間の東西棟として復原したが柱穴のずれがひどく1棟の建物とするには無理な点が多い。

土壇 (SK 575、577、579、581、582、583) 発掘地域の北半部に集中して6個の土壇を検出した。規模はまちまちであるが1.5m×2.5m~2.5m×3.0m程度のものである。特にSK 575、577は溝SD 587を切っており溝との前後関係をつかむことができた。またこれらの土壇から検出される遺物は少いが近世陶器を含んだものもあり、時期的には新しい。

このほか発掘地域北半部においては0.2~0.3m前後のピット多数を検出した。これらのピットから検出した遺物は近世陶器などを含んでおり今回検出した遺構の中ではもっとも新しい時期のものである。

出土遺物

今回の調査で出土した遺物は土器・瓦類・金属製品・石製品などで、とくに土器はSD 587、SD 562の埋土から多量に出土した。もっとも問題となるSA 560・SB 580・SA 505の時期については、SA 560柱穴内に少量の土器片・瓦片を検出した程度で、いずれも積局的な資料に乏しい。



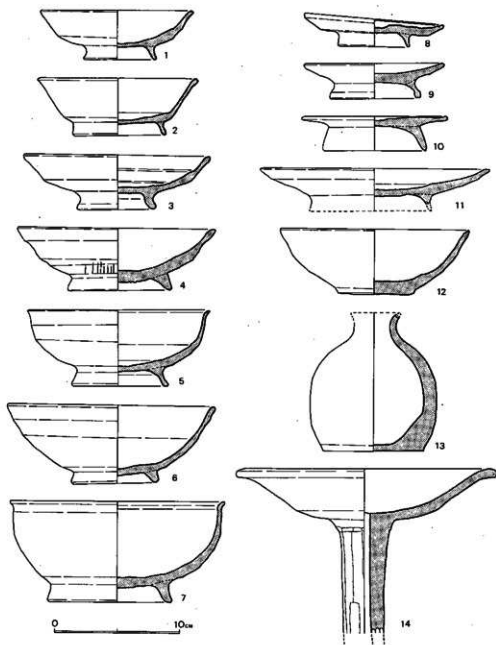
第9图 第31次发掘调查出土土器实测图

土器 (第9~14図、図版11~13)

土師器 (第9図1~32、第10図1~14、第11図1・2) 器種には皿・杯・壺、およびこれに高台の付くものや、甕・高杯があり、土師質のもので土鍋・鉢・瓶などがある。

小皿 (第9図1~14) 暗褐色土出土のものである。外見では砂粒をあまり含まない胎土、やや硬質の焼成、器面が淡い茶灰色または黄灰色をなすことや、成形時に体部内外面をヨコナデ、底部内面をナデによる調整を施すものなどが一般的である。底部の製作技法はヘラ切り (1~10、12~14) と糸切り (11) に分類されるが、今回では後者はごく少量に過ぎない。これらの底部の成形の後、1、3、5、6、12のように簾状圧痕の残るものも多い。復原可能なヘラ切り底のもの54個体についての法量は口径 8.7~12.4cm、器高0.9~2.3cmであるが、大半は口径 8.7~10.9cmの中に入る。1のように浅く口径の小さなもの、10のように浅く口径の大きなもの、13、14のようにやや深いものなどがあり、形態は様々である。6~9は口縁部内面にヨコナデによる沈線を持つ一群で、一見蓋のようであるが、これと対をなす身はない。従って小皿の一群と思われる。

杯 (第9図15~32) 暗褐色土層出土のものである。深いものは壺としてもよい。胎土・焼成・色調とも小皿と同様なものが多い。底部の技法によりヘラ切り (15~24・29~31) と糸切り (25~28) に分類されるが、今回では後者の出土量は少ない。16、17、19、22、23、26、28、29の底部には簾状痕があり、とくに16は幅広で凹凸の激しいものによるせいか、底部が凸状に張り出す。簾状痕そのものが成形にあたって何を意味するのかが明確ではないが、素材は幅数ミリの目の細かいものから2cm前後の目の粗いものまであり、凹凸も少ないものから激しいものまで各種認められる。簾状痕は通常1回かぎり1方向に付されていて、平坦に付くもの、あるいは底部の湾曲に沿って付くものなどがあり、今回1点のみで非常にまれであるが2方向に付くものもある。出土遺物の大半は土師器でありその中でも大勢は、ヘラ切り底の杯が占め、数千個体に達すると考えられる。暗褐色土出土の約108個体については、法量より次の4群に分類される。〔A〕15、16のように口径9.0cm以下、器高2.4~3.4cmのもので、出土量はごく少ない。〔B〕17~19のように口径11.5~13.2cm、器高3.1~4.3cmのもので、出土量はやや少ない。〔C〕20~24・29・30のように口径13.6~16.6cm、器高2.6~5.1cmのもので、約101個体あり、大半はこれに属する。〔D〕31のように口径18.0cm、器高4.3cmの大形のもので、出土量はごく少ない。形態は23のように丸い底部と体部の境に屈曲をもつものや、19・31のようにこの境が不明瞭のものが一般的である。20・21のように平底に近いものは、糸切りのもとの形態上の区別が付きにくい。29・30は〔C〕群の中でも浅く皿状を呈し、24は深く壺状を呈するが、他に口縁部の形態など細かい点を見ると様々である。32は大形の特異なもので、平坦な底部に厚い器壁を有し、赤褐色を呈し、調整痕は残さぬが体部外面の凹凸はヨコナデによるものと思われる。調整は17・18・20~22・29・30のように体部内外面をヨコナデ、底部内面をナデにより完成するものが多いが、その後、ヘラ状のもので内面を研磨したとみられるものもある。19はその調整法を示す例で、内面中央から左斜め上方にヘラを移動し、これをくり返し行なって一周する。



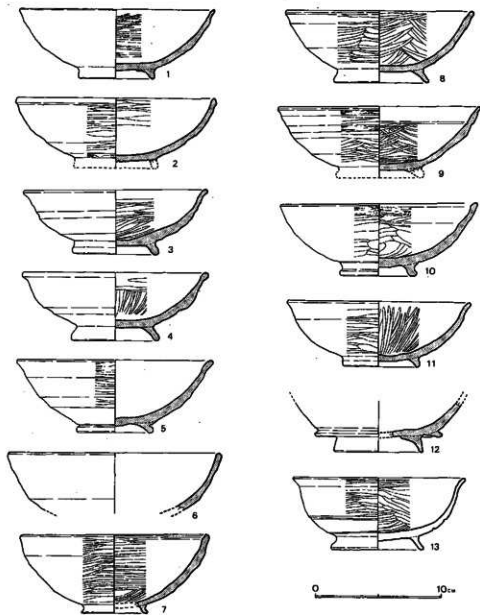
第10图 第31次発掘調査出土実測図

次に内面中央から右斜め上方にヘラを移動し前と同様に一周する。以上により研磨と同様な効果をもたらしたものと思われるが、24ではヘラの刃キズがあり、左斜め上方の調整のみ認められる。口縁部付近にある右斜め方向のヘラ痕は体部中位で方向を変えたヘラの連続線とも見られる。このような調整のわかる例はごくまれであるが、23・31のように内面のヨコナデが消され、なめらかなものは同様な調整がなされたと思われる。糸切り底は、暗褐色土出土の復原可能なものが9個あり、口径14.0～16.2cm、器高3.4～4.0cmでヘラ切り底〔C〕と法量は近似する。糸切り技法によるため通常、底部は平坦化する。26は底部が丸く形態上、ヘラ切り底と近似するが、器形の重みにより底部の彎曲したものである。調整は体部内外面にヨコナデ、底部内面にナデを施しているが、前述したヘラ磨きを確実に残すものは今のところない。

有高台埴(第10図1～7・12、第11図1・2)2はS D 570埋土、他は暗褐色土出土のものである。出土量は埴に次いで多い。浅いものは有高台埴としてもよい。底部は付高台(1～7)と切り高台(12)とがある。さらに付高台にはヘラ切りの底部に高台を付したと考えられるもの(1～7)、および図示していないが糸切り底に高台を付したものがあり、後者はごく少数である。また切り高台には図示していないが円板状の糸切り底が少数あり、12は器面の剝落により定かでないが器形は糸切りに近似し、無高台の埴とも見られる。しかも内面と外面口縁部は黒色を呈し、後述する黒色土器のように炭素を吸着させたものかと思われる。大半は胎土・色調・焼成・埴部の調整とも小皿・埴と同様で、高台貼付後にこの周辺をヨコナデにより完成する。2・4・5は底部外面に塵状痕があり、とくに4では高台の下端部に塵状痕に似た圧痕が残る。暗褐色土出土の復原可能な24個体については、法量から1・2のように口径12.1～12.9cm器高4.0～4.7cmのもの、3～6のように口径13.9～16.7cm、器高4.1～6.2cmまでのものに大別され、夫々埴の〔B〕・〔C〕群に対応するが、埴と同様に後者が多い。7は口径、器高ともに大形である。形態は5のような例が一般的である。その他、第11図1・2のように内面、または内外面に黒色土器と同様のヘラ磨きを施す例も少数ながらある。いずれも暗褐色土出土で両者とも破片である。1は内面のみヘラ磨きを施し、その方向は、体部では横、底部では一方に平行である。2は体部内外面ともヨコ方向のヘラ磨きを施し、底部外面には塵状痕がある。胎土は精選されて砂粒を含まず、硬質の焼成である。いずれも淡茶灰色で炭素を吸着させた跡は全くないが、ヘラ磨きは黒色土器と同様で、前述した埴のものとは全く違い、細かく磨かれる。調整具が異なる事を意味する。

有高台皿(第10図8～11)暗褐色土出土である。法量は8～10のように、口径11.1～12.5cm、器高1.8～2.8cmの小形のもので殆んどであり、口径14.7cm器高3.0cmの中形のもの、11のように口径18.2cm、器高3.4cmの大形のものなどが若干ある。法量より見て皿部は小皿のうち口径の大きな群と対応するか、もしくは有高台皿専用に生産されたと考えられ、胎土・色調・焼成・調整とも小皿と同様である。高台貼付後にヨコナデで完成するため、外面底部の製作技法は消されているものが多いが一部にヘラ切り痕を残すものがある。8・11は底部に塵状痕がある。8は口縁部内面に凹線があり、小皿の6～9に関連性を認める。10は高台が高く、皿部は浅く平坦になっている。

瓶（第10図13）暗褐色土出土である。土師質というよりむしろ瓦質に近く、砂粒の少ない胎土でやや軟質である。口縁先端は欠損するが完形に近い。平坦なヘラ切り底に、ぶ厚い器壁を有



第11図 第31次発掘調査出土土器実測図

し、体部外面はヨコナデを施す。他に灰褐土出土の小形のもが1点あり、体部は13よりややふくらむが、焼成、色調、形態、調整とも同様である。これまでの調査でも出土しているが量は少ない。

高杯(第10図14)暗褐土出土で、1例のみである。脚部は直径1.4cmの丸棒状のものに粘土をまきつけ、後にタテ方向のヘラケズリを行なって面取りをする。杯部は下位で鈍く内側に屈折し、上向しつつ外側へ開き、口縁部は緩く外反する。器面の剥落のため調整は不明瞭である。杯、脚部の接合点は不明瞭であり、復原すると脚部の孔をふさいでいないようになるが、孔の上に薄く粘土を補ったものかもしれない。復原口径は20.7cmである。

黒色土器(第11図3~5・8~12)土師器の表面、とくに内面を丁寧に磨き、炭素を吸着させたもので、いずれも暗褐土出土である。

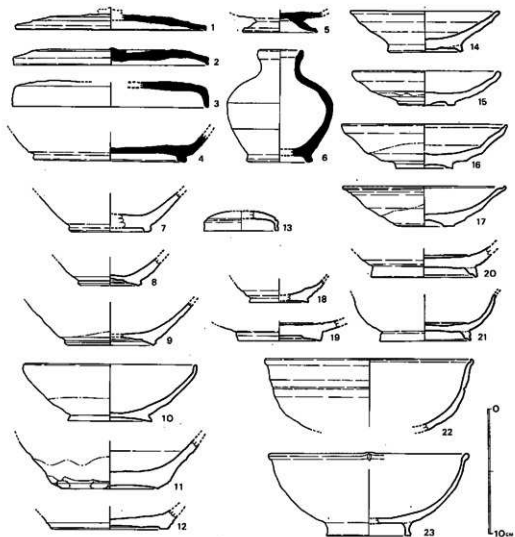
有高台塚(3~5・8~12)3~5のように内面をいぶしたものと、8~12のように内外面をいぶしたものに分類され、前者を〔A〕、後者を〔B〕とする。3・4は内面のみ、5・8~12は内外面ヘラ磨きを施す。8・9・10に顕著なように、大半は内面底部は一方に平行して、また体部内外面は、全周の $\frac{1}{4}$ ~ $\frac{1}{2}$ で方向を変えるヨコ方向のヘラ磨きである。4・11は内面底部中央から口縁部にかけて放射状のタテヘラ磨きを行う少数の例である。〔A〕では外面にヘラ磨きを行なわないものが多い。5は1点だけであるが、内外面とも磨かれ、外面は体部中位まで炭素が吸着している。本来、炭素の吸着を目的としてヘラ磨きを行なうのであれば、むしろ〔B〕とも見れる。また外面のヘラ磨きを上・中・下位と3段階に分けているもの9、体部下位にヘラ削りのままを残すもの5・10等があり、さらに分類されるものと思われる。12は器壁の剥落がひどく調整が不明であるが、〔B〕に属すもので、変形した高台をもつ、器形は明らかでない。今回は多くの黒色土器が出土したが、全体の土器出土量から見れば10%にも達していない。

瓦器(第11図6・7)ここで言う瓦器とは黒色土器を母体として出現したものを指すことにする。

有高台塚(6・7)、3点あり、いずれも暗褐土出土で破片である。7は目の細かいヘラ磨きを、底部内面には一方に、体部内外面はヨコ方向に施している。内面の口縁部下に一条の沈線があり、形態は畿内で出土する古手のものに酷似している。表面は光沢があり銀白色を呈する。6は底部を欠損する。ヘラ磨きは器壁の磨滅によって明確ではない。内面から外面体部上位にかけて灰黒色、他は灰白色を呈しやや硬質である。体部中位に鈍い屈曲を持つ。

須恵質土器(第11図13)

有高台塚(13)、ほぼ完形で口径13.7cm、器高5.7cmである。器形は土師器・黒色土器と近似し、体部内外面には黒色土器と同様なヘラ磨きが施されている。体部中位をやや下る所へヘラによる沈線があり、以下はヘラ削りのままである。胎土には大粒の砂粒を若干混じえ、硬質の焼成で灰色を呈す。形態・調整は土師器・黒色土器、質は須恵器そのものでいずれの範疇に入るものか疑問が残る。これまでの調査においても出土例がない。他に同様な破片が3個体あり、



第12図 第31次発掘調査出土土器実測図

一群のものとみなされる。いずれにしてもこの種のものは須恵器窯と同様な効果を持つ窯の存在が前提となる。

須恵器（第12図1～5）

胎土には砂粒を若干混じえ、硬質で灰色を呈す。出土量は少ない。5はSD 554埋土、他は暗褐色土出土である。

蓋（1～3） 1はツمامミを欠損し、残存する。口縁部が短かく、屈曲して断面三角形をなす。天井部をヘラ削り、口縁部内外面をヨコナデ、他はナデで調整する。2は残存し、口

縁部の屈曲以下はやや内弯する。調整は1と同じ。3は $\frac{1}{2}$ 程の破片で、口縁部が鋭く屈折し、端部に平坦面をもつ、つまみを有するものか不明である。外面は全面へら削り、内面は口縁部をヨコナデ、他をナデで調整する。

有高台壇4) 底部のみ $\frac{1}{2}$ 残存する。短い高台を付し、底部内面はナデ、底部外面はへら削りのまま、他はヨコナデを施す。

脚付瓶5) 低い脚部のみ残存し、その内外面にヨコナデを施す。先端部は短く屈曲する。

壺6) 底部を大きく欠損する。外面体部の脣部以下はへら削りし、他はヨコナデを施す。高台は低くやや外向し、口縁部は鈍く内向する。この内面は強いヨコナデにより凹む。以上の他に変がある。

磁器・陶器(第12図、図版13)

磁器には龍泉窯・越州窯・李朝などの青磁・その他の白磁・陶器には緑釉・瀬戸・唐津・伊万里・その他がある。出土量は灰褐土に多い。

越州窯青磁壇(7-12) 暗褐土出土のものである。胎土は緻密で、黄色味を帯びる灰白色を呈し、釉は黄緑色で、器面に均一にうすくかけられる。底部の無釉の部分が灰赤色をなすのも見られる。底部高台の形状により次の5群に分類される。高台はすべてケズリ出しによる成形である。【A】:7は断面長方形で、高台先端部のみ無釉である。

【B】:10は断面三角状に横へ張り出し、底部は浅いあげ底である。外面の体部下位から底部にかけては無釉で、灰赤色を呈すものが多い。【C】:【B】の外面底部に1段-数段のくり込みをへらで入れたもの(8・9)で、釉のかけ方は【B】と同様である。【D】:11は三角形のごく不明瞭な高台で、底部は浅いあげ底である。外外面は無釉であるが、全面に釉のかかるものもある。【E】:【D】の底部外面に、へらでくり込みを入れ、低い高台を持つもの(12)で、底部外面は無釉である。口縁部は少数であり分類するにいたってはいないが、外面よりへらで浅くV字形の切り込みを入れ、花卉に擬せたものがある。

青磁合子蓋(13)、暗褐土出土で、 $\frac{1}{2}$ 残存し、釉・胎土とも越州窯のものに類似する。天井部から口縁部に移る屈折点上に一条の沈線が入る。調整は釉のために定かでない。

灰釉陶器 有高台皿(14)暗褐土出土で $\frac{1}{2}$ 程残存する。胎土は密で灰色を呈し、須恵質である。体部内外面及び底部外面は丁寧なヨコナデ、底部内面はナデにより調整され、体部内外面に施釉されている。釉は緑がかかった灰色で、口縁付近ではやや厚く緑色が濃い。

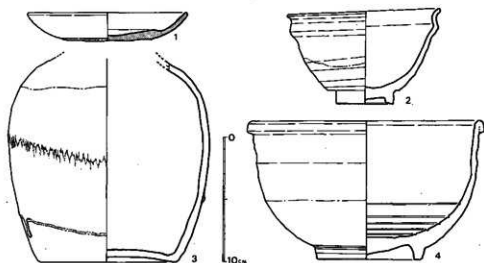
唐津系陶器 有高台皿(15-17) 15・16は灰褐土、17は暗褐土出土で $\frac{1}{2}$ - $\frac{1}{3}$ の破片である。胎土は密で、灰色(15)または茶を帯びる灰色(16・17)を呈し硬質である。高台はへら削り出しによるが15・16は底部外面中央に取り残しがあり凸状に張り出す。外面の調整では15が体部中位以上に、16が体部下位の屈折以上に、17が体部全体に夫々ヨコナデを行なっている。釉は灰釉陶器に似た灰緑色または黄緑色のもので内面と体部外面以上に施釉される。口縁部は15・16がやや内側へ屈曲し、17は外反しつつ端部付近が短く内側へ屈曲して、この内面は凹線をなす。いずれも高台は口径に対して、小さく低いのが特徴である。

緑釉陶器 有高台壇(18~23) 21は灰褐土、他は暗褐土出土である。18~21は須恵質、22・23は土師質のものに施釉されている。高台は19のようにへら削り出しのもの、18のように糸切りのもの、20のようにへら切りの壇に高台を付すもの、21のように糸切りの壇に高台を付すものなどがあるが18・19のようなものは少ない。また19~21は底部内面に1~数条の凹線があり、20~21は高台の内側にヨコナデによる凹線を入れるものである。22は口縁部の内面に凹線を入れる。23は外面から口縁部下をへらで押圧して器面を凹ませ、上方より見る時、花卉状に見える。釉は大半のものが全面にかかっている。

土壇・井戸・ピット出土土器 (第13図)

土師器 皿(1)、井戸SE 572出土で $\frac{1}{2}$ 残存する。底部は糸切りで、体部内外面にヨコナデが施されている。胎土は砂粒がなく硬質で淡茶色を呈する。他に土師器の有高台壇等がある。

天目茶碗(2)、SX578のピットの1つから出土したもので、 $\frac{1}{2}$ 程残存する。体部外面下半はへら削りで、高台は削り出しにより成形され、外部底面は削り残しが見られ凸状に張り出す。口縁部下1.5cmは鈍く屈折し、口縁部は外反する。胎土は砂粒がなく内部は灰色であるが底部外面の無釉の部分は赤褐色を呈する。釉は内面から外面体部中位以上までかけられ、



第13図 第31次発掘調査出土土器実測図

黒茶色を呈す。古瀬戸と思われる。

近世陶器(3・4)、いずれも土壌SK 575出土で $\frac{1}{2}$ 以上残存する。3は壺で口縁を欠損する。外面体部下位から底部は無釉で茶色を呈し、底部はナデ、体部下位はヨコナデで調整される。胎土は砂粒が少ないが粗く、硬質の焼成であり、内部が灰白色を呈す。内面は灰色がかかった茶色の釉で艶がない。外面では肩部以上は釉が剥落し、肩部から体部中位は黄色を混じる濃茶色の釉で光沢がある。これ以下は光沢のない淡黄灰色の釉である。4は鉢で内外面の体部中位以下はへら削りを行ない、内面ではその沈線が数条付く。高台も削り出しである。口縁部は肥厚するが、これは口縁部を折り曲げて重ねたようである。胎土は砂粒がないが粗く硬質で、釉は内面から外面体部中位以上にうすくかけられる、茶色を呈して光沢がない。無釉の部分は赤褐色である。

SA 560柱穴内出土土器(第14図)

須恵器で有高台境であり、 $\frac{1}{2}$ 程の破片で口縁部を欠損する。内面の底部はナデ、体部をヨコナデ、外面は底部、体部にへら削りを、高台周辺にヨコナデの調整を施している。高台はやや低く、外向する。

(註1) 田中 琢「古代・中世における手工業の発達(窯業) 一畿内一」『日本の考古学VI 歴史時代(上)』(昭和45年)の分類に従った。

(註2) ①白石太郎「いわゆる瓦器に関する二・三の問題—古代末—中世初頭における土器の生産と流通に関する一考察—」『古代学研究54』(1969)

②森田勉「九州地方の瓦器概について」—型式分類と編年試案—『考古学雑誌59—2』(昭和48年)などで限定される「瓦器」である。



第14図 第31次発掘調査SA 560
柱穴出土土器実測図

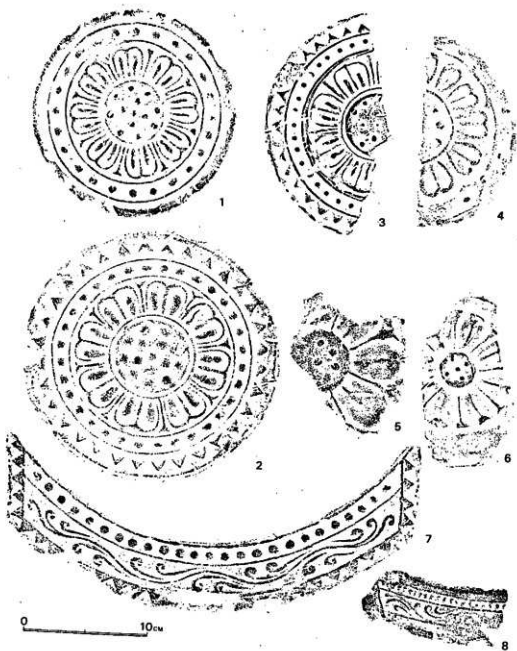
瓦埴類

今回の調査で出土した瓦埴類は比較的少くきわだった特徴はない。丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦が主であり、このほかに文様埴・鬼瓦がある。これらは主に遺構上面を覆っている暗褐色土層から出土した。

特に文様埴については、これまでも政庁跡、学校院跡で出土しているがこれらはすべて破片であり、今回出土した文様埴は完形品であるところから貴重な資料といえる。

軒先瓦は総数 103点、文字瓦は 282点である。

軒丸瓦は62点で8型式10種類に分類できる。このうち第15図、①、②が多く、両者で全体の40%を占めている。①は鴻臚館式とよばれているもので大宰府では普遍的なものである。内区は中房に1+4+8の蓮子を配し複弁八弁蓮華文である。外区内縁は24個の珠文を配し外縁は素



第15図 第31次発掘調査出土軒光瓦拓影

縁である。

②は老司Ⅱ式とよばれているもので内区は中房に1+5+9の蓮子を配し複弁八弁蓮華文である。外区は内縁に珠文を32個、また外縁には外向する凸鋸歯文を32個配している。全体的に

文様の彫りも深く、割り付けはきわめて整然としている。瓦当裏面は周縁に沿って段をなすものと、浅く溝状にくぼむものがある。また裏面の調整は櫛目によるものが多い。

③は老司式の系統をひくもので、きわめて特徴のある瓦である。内区は外区よりも一段低く中房には1+4+9の蓮子を配し複弁八弁蓮華文である。外区は内縁、外縁とも平面をなし、内縁には小さな珠文を外縁には外向する凸鋸歯文を密に配している。瓦当裏面は老司Ⅱ式同様周縁に沿って一段高くなっている。また裏面はナデツケによって調整している。⑤、⑥はいずれも単弁八弁蓮華文である。⑤は一段高い中房に1+8の蓮子を配し弁幅が広く、弁の中央に稜線が通る。外区は欠損しているため不明である。⑥は小さく一段高い中房に1+4の蓮子を配し、弁は⑤に比較して弁幅が狭い。弁中央にかすかに稜線が通る。外区は素文である。瓦当裏面は弯曲しており、ナデツケによって仕上げている。このような古い要素を持った単弁系の軒丸瓦は大事府ではきわめて出土例が少ない。

軒平瓦は総数41点で10型式に分類できる。このうち第15図⑦は軒丸瓦第15図②の老司Ⅱ式とセットをなすもので、今回出土のうちでは最も多い。瓦当内区文様は右から左へゆるやかに流れる雁行唐草文である。外区は上縁に25個の珠文を配し、下縁は外向する凸鋸歯文23個を配している。脇区は下縁と同様の鋸歯文を左右それぞれ4個を配している。この老司Ⅱ式軒平瓦はいずれも段頸をなし頸部には横方向、平瓦部には縦方向の縄目の叩きを残すものと、すり消したものがある。第15図⑧は瓦当面が磨滅しているため文様の細部については不明であるが、幅の狭い内区には右から左へ流れる断続的な唐草文を配し、外区は上縁・下縁とも小さな珠文をきわめて密に配している。

文字瓦は総数282点出土している。

「平井」、「賀茂」、「佐」銘のものが大半を占めるが、これらは、いずれも叩目、書体などによって、さらに細分される。

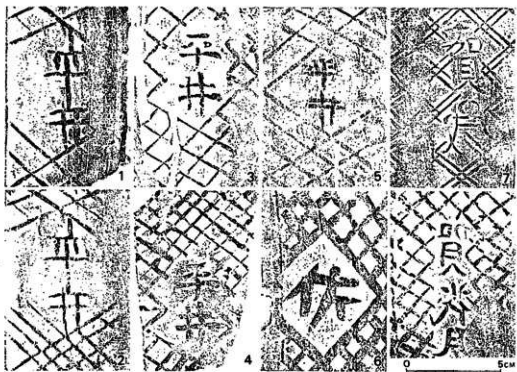
まず「平井」の銘を有するものは、文字自体について「平井」、「平井瓦」、「平井瓦屋」の3種類があり、これらはさらに叩目によって13種類に分類できる。この「平井」銘の叩きについては第16図に示すごとく後に叩き板に格子の文線を追刻したものがある。第16図①—第16図②第16図③—第16図④がその例で文線を追刻することによって格子の目を小さくしている。この叩き板に文線を追刻することについては、はやく中山平次郎が指摘している。

次に「賀茂」銘のものは10種類に分類できる。文字自体も「賀」、「賀茂」、「賀茂瓦」の3種類があり、叩きの格子は2重の線で構成されているものが多いことが、この瓦の特徴である。

「佐」の銘のものはすべて一字であるが、裏文字になったものなど9種類に分類できる。今回出土した中では第16図⑥が最も多い。

このほか「國」、「前」、「安楽之寺」、「安」、「門司」などがあるが出土点数はきわめて少い。

文様壇は今回2点出土したが、このうちの一点が先にも述べた如く完形品である(第17図)



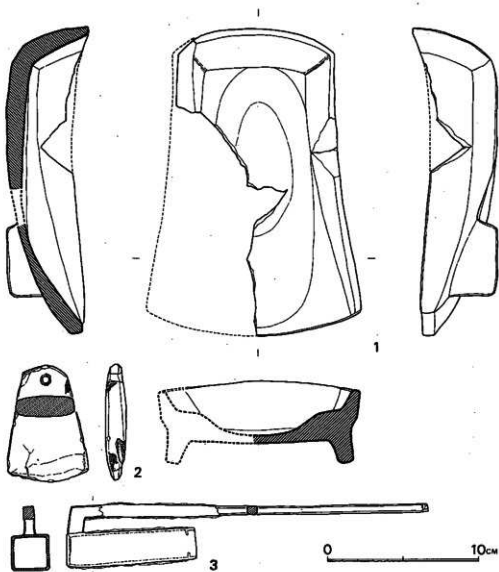
第16図 第31次発掘調査出土文字瓦拓影



第17図 第31次発掘調査出土紋様磚拓影

長さ33.0cm、幅27.0cm、厚さ6.5cmの大形方場で、文様は上面および側面の2ヶ所にある。焼成が軟質であり、全体的に磨滅しているため文様自体は必ずしも鮮明ではない。まず上面の文様は中央に径10cmの単弁蓮文を配するがその中房には方形の釘穴を中心に8個の蓮子を配している。

この蓮華文の外周には、さらに華麗な蔓草文をめぐらしている。周縁は幅約2cmを界線でかこみかなり密に珠文を配しその四隅には観花文を配している。これらの文様の間は波状文でうずめている。



第18図 第31次発掘調査出土石製品・鉄製品実測図

側面は上面同様珠文帯でかこみ唐草文を配しているが上面よりもさらに磨滅がひどく文様の構成については不明であるが第6次調査の回廊西南隅出土のものと同じ文様であろう。

註① 中山平次郎「古瓦類雜考」(四)(考古学雜誌^(註2)第6卷10号)大正5年6月5日

註② 福岡県教育委員会「大宰府史跡」昭和45年度発掘調査の概要

(福岡県文化財調査報告書第47集)

昭和46年3月31日

石製品 (第18図1・2, 図版15)

石製品として2点ある。そのうち1点は硯で、他は撥形を呈する石製品である。

硯は風字硯で全体の約半が残存しており復原が可能である。長さ20.4cm、前辺の幅約10.6cm、後辺の幅約14.0cmである。後辺に向かってゆるやかに広がる。上面は左右と前方の三辺に縁をめぐらし、後辺のみ縁がなく前方に軽く傾斜している。裏面の後方両端の近くには長さ4.5cm、幅1.0cm、高さ3.0cmの短脚2個(但し1個は欠損)をとりつけている。なお硯面には短脚によって軽い傾斜を保っているが、陸と海の境界ははっきりしないが中央部に階円形状にへこみがみられる。このへこみについては製作時に意図的に作られたものか後の使用による摩耗かは明確でない、造りは丁寧であり、風色を呈している。滑石製の硯については以前に天満宮の境内から出土した例が報告されている。出土した層位は灰褐色土層で共伴の土器から平安後期に考えられる。^(註1)

他の1点の撥形を呈する石製品は、上端幅3.0cm、下端幅5.4cm、厚さ1.8cmである。下端を刃状にとがらす形になっており、上端・下端ともゆるい円弧状を呈している。また上端近くの中央に0.5cmの孔を穿っており、全体に刀子状のもので丁寧整形している痕跡がみられる。用途については不明である。暗灰色を呈し、前述の硯よりや・硬質である。出土層位は硯と同じである。

鉄製品 (第18図3, 図版15)

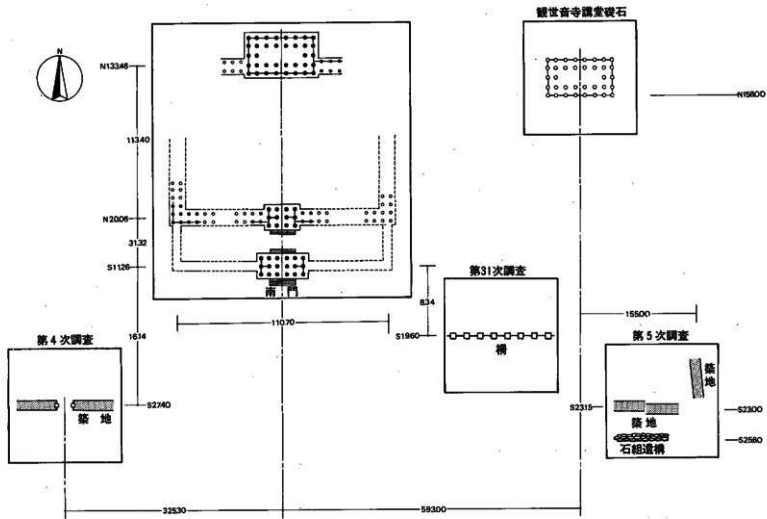
井戸SE 573の井戸枠内の埋土中より出土した。L字状の心棒の先端に断面四角の筒をつけている。心棒は長さ23.6cm、断面は0.6cm前後の正方形のもので面取りをしてある。先端にいくほど大きくなり直径0.9cmを測る。先端に付いている筒は長さ8.5cm、幅2.5cm、厚さ2.3cmのほぼ正方形のもので0.15cmの鉄板である。一方は明らかに開口しており、開口部近くにしきりがあるのが認められるが明確でない。全体に腐蝕が激しく明瞭さを欠くが、部分的に金銅張りのものであったと考えられる。用途については不明確であるが錠(海老錠)の一部とも考えられる。

註① 渡辺正気「福岡県太宰府天満宮境内発見の滑石硯」九州考古学11・12-1961
参考文献

「新版考古学講座第7巻」雄山閣

小 結

今回検出した櫛(SA 560)は大宰府政庁の四至を考えるうえにおいて有力なる根拠を与えたとはいえる。これまで政庁の四至については都府樓を中心として遺存する礎石や地形などをもとに政庁中軸線から東西2町ずつの方4町が庁域であると考えられてきた。すなわち南は都府樓前面を東西に走る県道で限り、東は月山の東方の小路、西は蔵司台地の西端、北は四王寺の



第19圖 大率府城内調査結果概念図

山脚を、その範囲とするものである。しかしながら先にも述べたごとく第4次調査においては政府中軸線から約330m西に寄った地点で東西にのびる築地が検出され、さらにほぼ3町にあたる325.30mのところでは脇門と考えられる遺構も検出されている。この築地は現在の地形から見てさらに東および西へのびていることが推定される。

今回検出した柵の東端は中軸線から約168m、すなわち約1町半の位置にあたり、さらに東および西へのびていることは確実である。特にこの柵の東方地域への行方は政庁と学校院との境界の問題をも含めて興味ある点といえる。このようにこれらの遺構の状況からみて庁域については、これまで推定されてきたよりもさらに広範囲にわたる可能性は大きいものと考えられる。

もちろん第4次調査で検出の築地と今回検出した柵とは構造も異なっており、後述のごとく位置的にずれており、これらの遺構を同時にしかも一連のものとして考えるには、現在の段階ではきわめて根拠が薄く今後の問題点として残されていることは否定できない。

次にこれらの遺構と南門築地との関係を比較すると第19図に示すごとく、第4次調査検出の築地は南門の心から19.14m、また今回検出の柵は8.34m 南へ寄っており、これら三つの遺構の接続関係を考察するについては今後の調査に待たねばならない。またこれらの遺構が政庁前面を東西に走る五条路といかなる関係にあるのかも今後に残されている問題である。

註① 鏡山猛、「大宰府都城の研究」風間書房 昭和43年6月

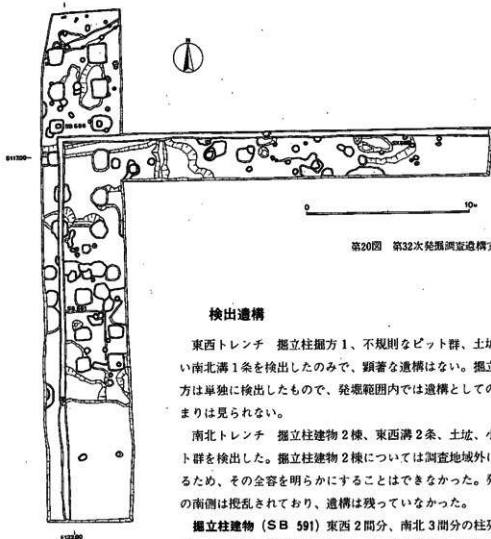
註② 第31次発掘調査については土地所有者である、太宰府町横岳在住の木村繁雄氏の多大なる援助のおかげである。記して謝意を表する。

4. 第32次調査

住宅新築にともなう事前調査として県道関屋一吉木線の南側、第31次調査地区の南約100mで第32次調査を実施した。当該地は大宰府条坊復原による左郭の五条二坊に推定される地域で、地番は筑紫郡太宰府町大字観世音寺字日吉 257番地である。

昭和46年度に第17次調査として右郭の五条二坊と推定される地域の発掘調査を実施した。第17次調査地区は「不丁」の字名であり、調査の結果、南北棟の礎石建物などを検出し、^(註1)政庁前面に広がる官衝の存在を推定させた。第17次調査地区と第32次調査地区とは政府中軸線をはさんでほぼ対称の地点であり、同じく台地状の地形を呈することにより、今回の調査においても建物の検出が期待された。

調査は昭和49年1月26日に開始し、3月15日に終了した。調査は対称地域にL字状に幅3m×長さ24mの東西トレンチ、および幅3m×長さ24mの南北トレンチを設定して行ったが、検出遺構の状況から、南北トレンチについては東西に各1m、北に5×7.5m 拡張した。



第20図 第32次発掘調査遺構実測図

検出遺構

東西トレンチ 掘立柱掘方1、不規則なピット群、土坑、浅い南北溝1条を検出したのみで、顕著な遺構はない。掘立柱掘方は単独に検出したもので、発掘範囲内では遺構としてのまともは見られない。

南北トレンチ 掘立柱建物2棟、東西溝2条、土坑、小ピット群を検出した。掘立柱建物2棟については調査地域外に拡がるため、その全容を明らかにすることはできなかった。発掘区の南側は擾乱されており、遺構は残っていなかった。

掘立柱建物 (SB 591) 東西2間分、南北3間分の柱列を検出した。東西の柱間寸法は7尺、南北柱間寸法は、北から第1、第2柱間および第3、第4柱間が6尺、第2、第3柱間が7尺である。掘方は、1辺約1mのほぼ方形プランを呈し、掘方内に河原石や瓦片のつまっているものがある。また、東柱列の掘方には径約20cmの柱根が残っていた。

この建物の南側は擾乱を受けており、掘方が南北3間分で完結するのかが否かは不明であるがSB 591は、恐らく北面廂の東西棟建物だと思われる。

掘立柱建物 (SB596) 南北5間分、東西1間分の柱列を検出した。掘方は1辺約1mのほぼ方形プランを呈し、一部には柱抜き穴が残っていた。恐らく南北棟になると考えられ、柱間寸法は桁行8尺、梁行7尺である。さらに西に伸びている。

小ビット群 直径5～10cmの小ビット群をSB 596のほぼ中央に検出した。遺構としてのま
とまりはなく性格は不明である。なお、小ビット群はSB 596の掘方埋土にも掘り込まれてい
ることより考えて、その時期はSB 596より新しくなる。

出土遺物

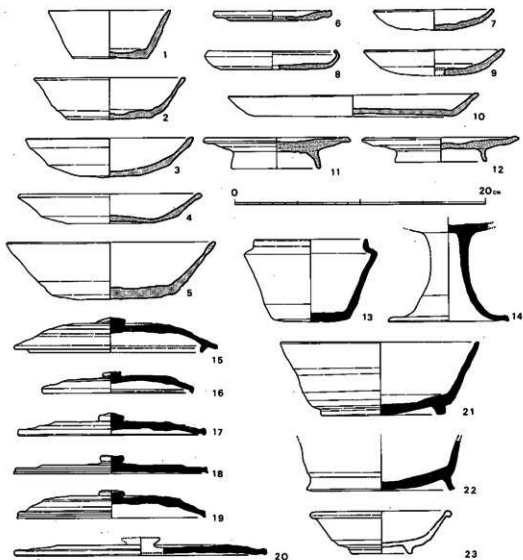
第32次調査で検出した遺物は土器（土師器・須恵器・青白磁類・陶器・緑釉など）、瓦類、石
製品（滑石製石鍋・磨製石剣など）、性格不明の鉄製品などである。遺物の出土層は表土・床土
と遺構面との間で、そこには大別して2層が認められた。上層は暗灰土層ないしは黒灰土層を
なし、下層は黄褐土層をなす。遺物は主としてこの両層から出土しているが、掘立柱掘方・土
城などの遺構埋土からの出土もある。

土器（第21図、図版13）

土師器（1～12） 器種には杯・有高台杯・皿・有高台皿・瓶などがあるが、杯・小皿が多
い。ヘラ切り底部の例がほとんどで糸切り底部の例は少ない。主として暗灰土・黄褐土両層か
ら出土しているが、全体に東西トレンチの西半分の暗灰土層からの出土が多い。

杯（1～5） 1・5は黄褐土層、2～4は暗灰土層からの出土である。全体に淡い茶白色
のものが多く、胎土にはあまり砂粒を含まず、焼成も硬質のものが多く、1は淡い赤褐色を呈
する。口径9.6cm、器高3.8cm。内外面ともに横なで調整をほどこしているが、内底部につい
ては明らかでない。底部はヘラ切りで、その上に約4mmほどの幅の簾状圧痕がみられる。2は
口径11.8cm、器高3.4cmの杯である。体部は内外面ともに横なで調整、内底部はなで調整、を
ほどこしている。底部はヘラ切りである。3は口径13.2cm、器高3.2cmほどの杯である。内外
面ともにみがきがみられるが、口縁端部から体部外面の中ほどにかけては横なで調整されてい
る。底部には4条からなる簾状圧痕がみられるが、ゆるやかな弧状をなしている。4は口径14.2cm
器高2.4cm、深さ1.8cmの浅い杯である。器形に歪みがみられ、復原実測している。3とほぼ
同様の調整で、体部の中ほどは部分的に明瞭な稜をなす。稜以下の体部下にはわずかに指お
さえの痕跡が放射状に残っている。底部には簾状圧痕がある。5は口径16.4cm、器高4.5cmを
はかり、赤褐色～茶褐色を呈する。内外面ともにほとんど調整を明らかにしえないが、横なで
と思われる。口縁端部は幅約1cmほどにわたって肥厚している。底部はヘラ切りされている。

皿（6～10） 6～9は暗灰土層、10は黄褐土層からの出土である。色調・胎土・焼成など
の特徴は杯とほとんど一致している。また大半は小皿である。6は口径9.3cm、器高0.9cmに
復原される小皿である。ヘラ切りと考えられる底部を除いて、横なで調整をほどこしている。
口縁端部内面には幅0.4cmの一条の凹線をめぐらしている。7は口径9.5cm、器高1.7cmをは
かる完形の皿である。内外面ともに磨滅がいちじるしく、調整は不明であるが、なで調整と



第21図 第32次発掘調査出土土器実測図

思われるような痕跡が部分的にある。底部はヘラ切りで、襷状圧痕を残している。8は特異な形態の小皿の例である。口径10.2cm、器高1.5cmに復原される。通例の小皿にくらべ、体部から口縁部にかけて内側に屈曲し、そろばん玉縁の断面をなす特徴をもっている。内外面ともに調整の方法が不鮮明であるが、一部に横なで調整の痕跡を残している。底部はヘラ切りされ、襷状圧痕を認めることができる。9は器形的には小皿(7)と坏(3)に類似し、中間に位置するが、

実物からして小皿に属すると考えられる。口径11.2cm、器高2.6cmに復原される。やや軟質の焼成である。体部は横なで調整されているが、内面の一部に削痕が横方向に走っている。底部はヘラ切りと思われる。10は口径19.9cm、器高1.8cmをはかる大形の皿である。淡い赤褐色を呈する。表面は磨滅し、内外ともに調整は明らかでない。内底部から体部の立ち上がりにかけての屈曲部に幅8mmほどの不明瞭な凹部がめぐらされている。底部はやや上げ底になっている。

有高台皿(11・12) いずれも暗灰土層からの出土である。11は径11.2cm、器高2.5cmをはかる赤褐色を呈する。胎土はよく選ばれており砂粒をあまり含まない。そのせいかかなり硬質に焼成されているものの脆さがみられる。皿部の調整は残りがよくないが一部に横なでおよびヘラ削りを認めうる。底部はヘラ切りされている。高台は貼付けられており、内外ともに横なで調整をほどこしている。12は径12.0cm、器高2.0cmをはかる。淡茶灰色の色調を呈するほかは11と同様の特徴を有する。高台先端に糜状圧痕かと思われる部分がある。

須恵器(13~22) 器種には坏蓋・有高台碗・壺・高坏などがある。土師器同様暗灰土・黄褐色土層からの出土例が多い。また土師器の出土が東西トレンチの西半分に多くみられたのに対し、須恵器は東半分からの出土が多い。

坏蓋(15~20) 17~19は暗灰土層、15・16・20は黄褐色土層からの出土で、ことに20は土坑SX588からの出土である。胎土に砂粒を含むものが多く焼成は硬質。灰褐色の色調をなすものが多く、黒灰色から小豆色まで様々である。15は最大径16.2cm、口径13.7cm、器高2.8cmをはかり、擬宝珠形つまみをもつ坏蓋である。口縁部の先端部分に身受けのためのかえりがつくられている。天井部にヘラ削りがみられるほかはほとんど横なでないしはなで調整がほどこされている。16は口径11.9cm、高さ1.7cmほどの小形の坏蓋で、扁平な形つまみをもつ。口縁先端は身受けのため短かく折り返えされ、断面三角形を呈している。調整は15とほとんど変わらないが、ややいびつな形をしている。17~19は口径14.8~15.4cm、器高1.5~2.2cmで形態は16に通じるものがあり、大きさの点からみれば類例のもっとも多いものである。調整も15・16と同様であるが、全体に扁平な18ではヘラ削りのあとになで調整をほどこした可能性がある。17・18はそれぞれ灰白色・淡茶灰色を呈し、他例にくらべやや軟質の焼成である。20は20.0cmほどに復原される口径をもつ。口径の大きさを除けば特徴は16~19と同様である。土坑SX588からの出土で、他に2点同一土坑から出土しているが、いずれも16~19と同様の特徴をもつ。

有高台碗(21・22) 21は黄褐色土層からの出土。かなりの砂粒を含む胎土は赤褐色を呈し、生焼けの製品と思われる。口径15.7cm、器高5.9cmをはかる。胴部はほぼ直線状に外に広がる。内面および外面の大半は横なで、なで調整をほどこされている。胴部下半から底部にかけてヘラ削りを行なっている。高台は低く、また高さにくらべて横幅を広くつくっている。ほぼ高台の下端ラインまで下がってくる底部とともにきわめて安定感に富むものである。22は硬質に焼成された有高台碗で、青灰粘質土層から出土した。外底部付近をヘラ削りにするほかはなで調

整を行なっている。高台は21にくらべて高く大きく外に広がる。また横幅もせまく、脚端は鋭利に仕上げられている。21同様底部は低く下がり、安定感を増している。

壺(13) 暗灰土層から口径8.8cm、器高6.6cmをはかる広口の壺が出土している。直線的につくられた体部の上部はすどく内側に屈曲して肩部をなす、口縁部は肩部に短かく直立するようにつくられており、蓋受部状をなしている。器面の残りはよくないが、内外面ともに横なで調整をほどこしているようである。体部の下方から底部にかけて、および内底部はへら削りを行なった可能性がある。本例は淡い赤褐色を呈しており、焼成も須恵器にしてはやや軟質である。生焼けの須恵器と判断したが、器形的には土師器にも類例があるので土師器と考えられないことはない。

高坏(14) 脚部のみ出土で、脚端径9.7cmをはかる。裾部で急に広がる短脚の例である。脚部から丸く外弯する端部は内側に折り返えされている。脚端折り返えし部は断面三角形を呈する。内外面ともにていねいな横なで調整をほどこし、ことに内面はしぼりを消している。わずかに残る坏底部内面もなで調整されている。

磁 器 (第21図)

塊(23) 口径10.9cm、器高3.4cmほどに復原される小形の青磁碗で、茶灰土層から出土した。体部はわずかに内弯しつつ外方に広がり、上部になるにしたがって直線的になる。口縁部はわずかの稜をもつものの丸くおさまられている。小さな削り出し高台を付している。内外面に重ね焼き痕を残す。全面に灰緑色の釉をかけている。

瓦 類

この調査で出土した瓦類は、丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦等である。これらは先にふれたように上層の暗灰土層から検出したもので軒丸瓦6個体、軒平瓦3個体、文字瓦31個体である。この他S B 591の柱穴掘り方から黒色をおびた縄目文瓦を出土した。

小 結

第32次調査で検出した主な遺構は、掘立柱建物2棟である。この建物の整地層は、細かい土器片、瓦片を含む暗灰色土に覆われている。暗灰色土に含まれる土器片は、へら切底の土師器と須恵器が殆んどで、糸切底の土師器は数点しか出土していない。よって、遺構面は平安時代の遺物を含む層に覆われていると考えられる。また、柱穴掘り方から出土した瓦は、縄目のものが主流を占めており、掘立柱建物の時期は、平安時代のうちにその下限を求めてさしつかえないと考えられる。

今回の調査で検出した2棟の掘立柱建物は昭和46年第17次調査において右郭五条二坊堆定地

において検出した礎石建物とともに、政庁前面の柔坊地域に遺構の存在することを証明した。この字日宮およびこの西に接する字不丁にかけては地形的に周囲よりも一段高く、また「不丁」の字名および礎石を使用した建物の存在することなどを考え合せるとこの政庁前面における遺構の性格は官衙である可能性が大きい。しかしながらこの地域は県道を境に未指定地であるが今後の調査については指定地同様広範囲にわたる発掘調査が必要であると思われる。

註① 九州歴史資料館「大宰府史跡」昭和46年度発掘調査略報 1972

圖 版



圖版1 第30次発掘の在地敷地(左側より)



図版 2
(上) 第30次発掘調査地域全景
(北カラ)
(下) 西脇殿建物 (SB 550)
玉石敷遺構 (SX 551)
(東カラ)

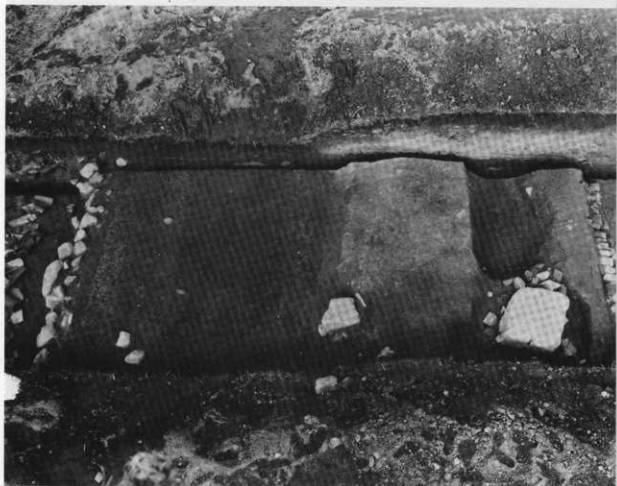
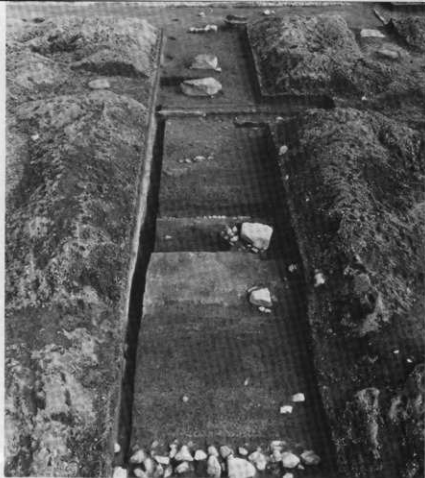
図版 3

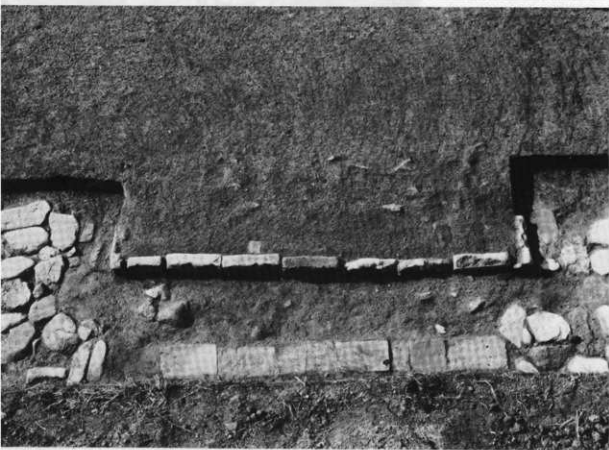
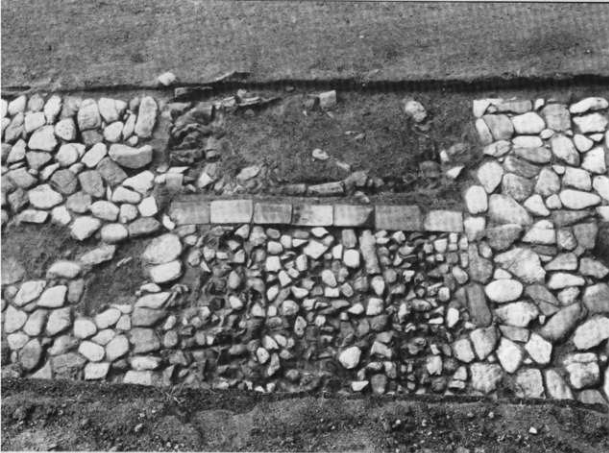
(上) 西脇殿建物 (S B 550)

西面回廊

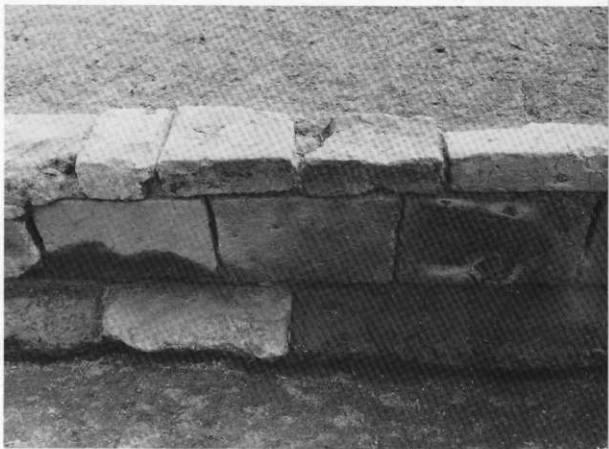
(西カラ)

(下) 西面回廊 (北カラ)

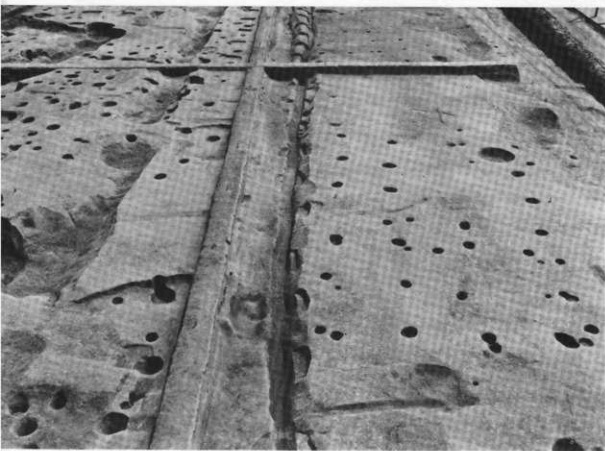
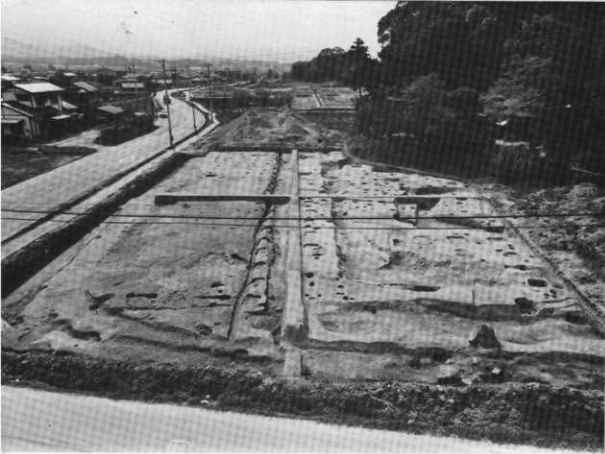




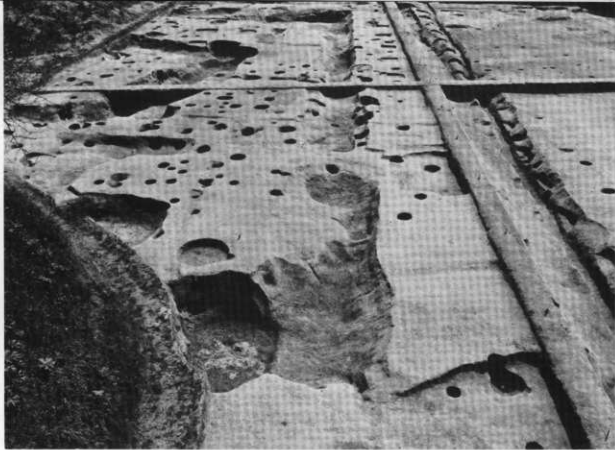
図版4 (上)、(下) 西脇殿建物 (S B550) 階段 (東カラ)



图版 5 (上)、(下) 西脇殿建物 (S B 550) 埴積基壇



図版6 (上) 第31次発掘調査地域全景(東カラ) (下) 柵(SA560)(西カラ)

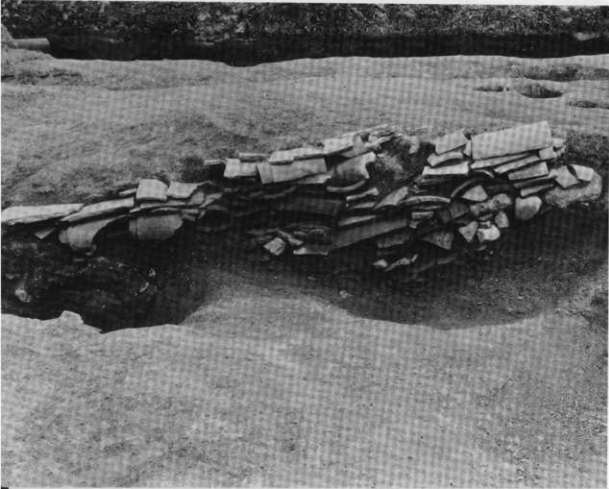


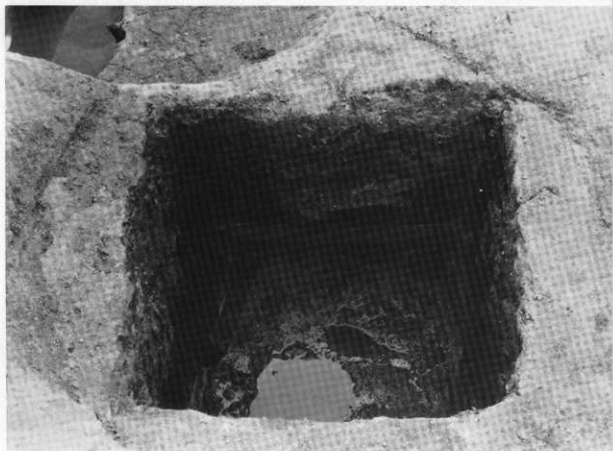
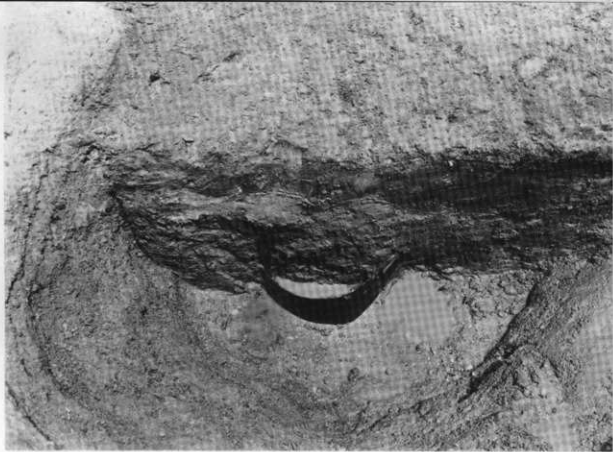
図版7 (上) 溝(SD570) (西カラ) (下) 掘立柱建物(SB580)・溝(SD587) (東カラ)

図版 8

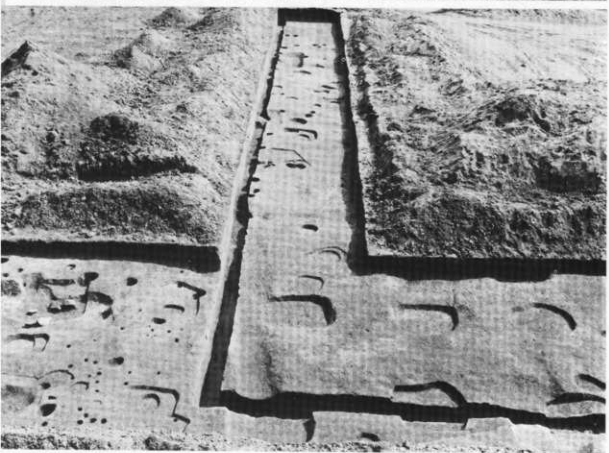
(上) 槽 (S A 565) (西カラ)

(下) 溝 (S D 570) 瓦積遺構
(西カラ)





図版9 (上) 井戸 (SE 573) (南カラ) (下) 井戸 (SE 572) (南カラ)



図版10 (上) 第32次発掘調査南北トレンチ(北カラ) (下) 第32次発掘調査東西トレンチ(西カラ)



図版11 第31次発掘調査出土土器



10: 1



10: 3



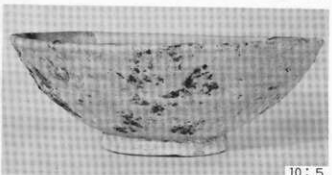
10: 2



10: 4



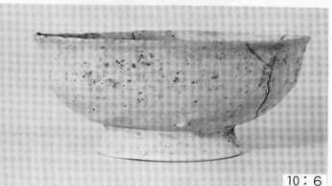
10: 8



10: 5



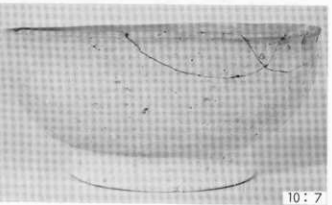
10: 10



10: 6



10: 13



10: 7

図版12 第31次発掘調査出土土器



11 : 5



11 : 11



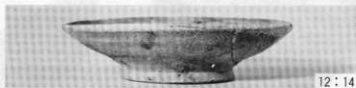
11 : 10



11 : 13



12 : 6



12 : 14



12 : 15



12 : 17



13 : 2



3 : 12



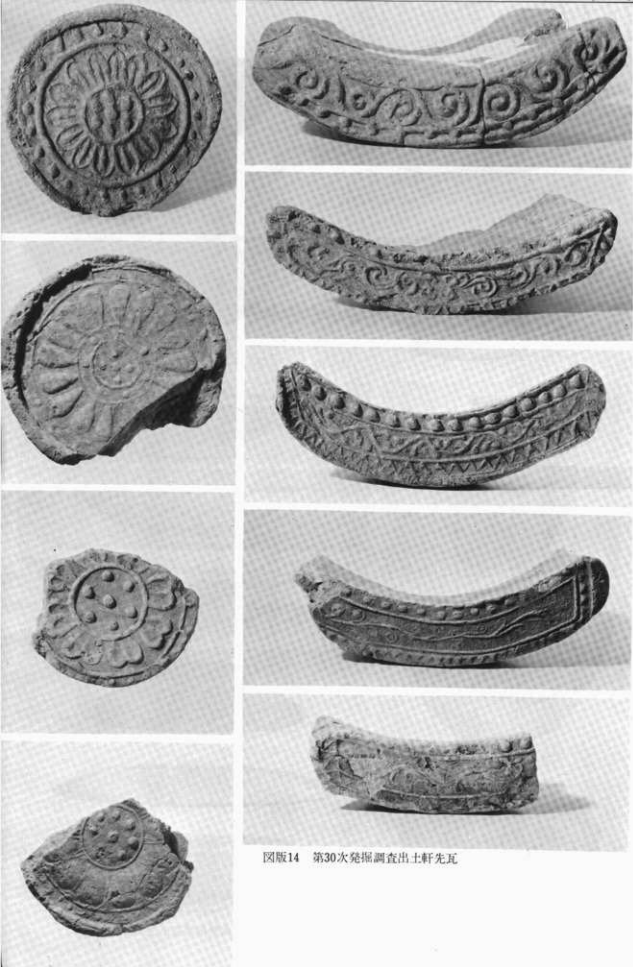
21 : 13



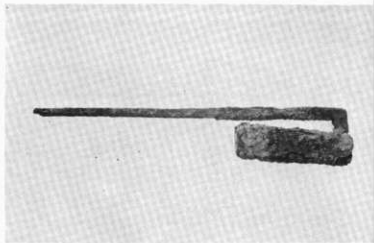
21 : 17



21 : 23



图版14 第30次发掘调查出土軒先瓦

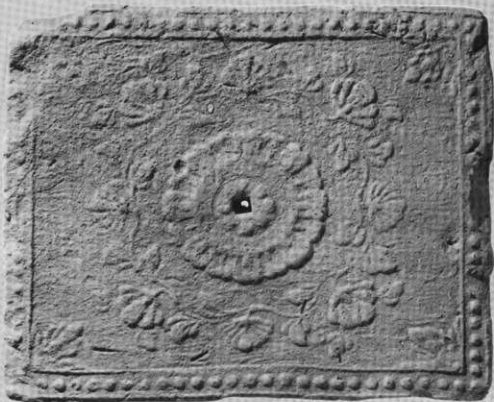


図版15
第30次発掘調査出土鬼瓦
第31次発掘調査出土
軒丸瓦・石製品・金属製品

第30次発掘調査出土文様埴



第31次発掘調査出土文様埴



大学館支社
第39-41. 第2次調査報告書
昭和49年8月

発行者 人間学研究所
出版部 東京都千代田区千代田1-10-5
印刷 秀巧印刷株式会社

この報告の製作、執筆、編集は当館調査課の毛利好雄、横田賢次郎、高橋暁、高倉洋彰、石丸洋、および調査補助員山中信夫がこれにあたった。なお第32次調査の遺稿については児玉真一（文化庁）の執筆によるものである。